
SOUL EATER ~ 聖剣と魔剣に選ばれ、剣職人を始めました ~

明星

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

S O U L E A T E R 聖剣と魔剣に選ばれ、剣職人を始めました

【Nコード】

N 1 4 5 8 P

【作者名】

明星

【あらすじ】

一人目の主人公「武田 浩一」は剣道の全国大会初戦を見事突破し、自分達の家へと帰宅している最中、弟の裕太が謎のケースを拾い上げその直後、トラックが猛スピードでやってきた。

彼は、弟を救うため迷わず飛び出した。

弟を助けると反対側の歩道に投げて、後は彼がトラックと衝突する

と誰もが思う中で、近くにあった謎のケースが突如鮮やかな光を放ち彼を包み込んだ。

次に彼が目を覚ました場所は、ソウルイーターを知っている人なら分かるあのウザい奴がいる洞窟の中だった。

一方、浩一が「ソウルイーター」の世界にトリップする前に「ポケツトモンスター」の世界に住む。

もう一匹の主人公「ピカチュウ」がいつもの様に好物のリンゴの木に向かい、リンゴを食べようとしたら突如突風に合い手に持っていたリンゴを落としてしまい、リンゴは謎の光を放つ穴の中へと入っていた。

これに対して、彼は自分の楽しみを奪った奴がこの先に居るのではないと思ひ光の穴へと入り、リンゴの後を追って駆けだした。

これは、異世界から訪れた少年と風を生む魔剣にして美しき人の姿をした悪魔と伝説ながらウザさNO.1の聖剣（とある理由でピカチュウの舎弟にされ、性格が原作に比べ真面目で仲間思いの良い奴になっている）と腹黒い性格に人の言葉を喋るコトのできる電気ネズミの波瀾万丈な物語である。

*注意 SOUL EATER NOT!>ソウルイーターノット!<(つぐみは、あるキャラクターの魔武器として参戦。アーニヤとめめは、主人公のパートナー【魔武器】の職人として原作とは違った職人になり参戦予定)&聖剣の刀鍛冶<ブラックスミス>(アリア出演+世界観一部設定のみ)&ポケットモンスター(ピカチュウ電撃参戦+他のポケモンも参戦予定+スマブラシリーズの技とアイテム+ポケモンシリーズのアイテムのみ登場)&T.O.L.O.V.E

る（金色の闇出演）&どこでもいっしょ（週刊トロステメンバー出演+マイルーム+ニヤバターアイテム等登場）&魔法少女リリカルなのはシリーズ（テストサロツサー家登場【フェイトやアルフを除き】。さらに、マテリアルズや初代祝福の風も主人公のとおる異能の力によって『魔武器』となり新たな力を得て、復活し参戦）&魔法先生ネギま！（アスナとガトウ参戦）。その他にアニメ・ゲーム・漫画等の作品から一部のキャラクターやアイテムや設定等が登場します。

第0話・プロローグ（前書き）

暇つぶしで書いた作品ですが、楽しんで読んでください！！

第0話：プロローグ

〔埼玉県立武道館・主道場1F〕

200X年9月10日(日)「PM03:17」

青空に雲が少しあるこの日。

俺、武田浩一は全国大会が行われている会場にて剣道の試合に出場している。

パン！！

と竹刀の乾いた音が響けばワアアと歓声もこの武道館に響いた。

「いいぞー！ 落ち着いていけー！」

「あと一人ー！！」

相手チームの歓声がうちのチーム全員のテンションを下げるとも知らずに・・・うちの東条高校は惨敗だった。

初戦にして強豪の西南とあたり、しかも三年の本郷部長が右腕を怪

我して出れないと言うオマケ。

相手チームは、まだ一人も敗退してない上にウチのチームはあっという間に4人抜きされた。

「俺のチームには、まだ“大将”が残っているぜ!!」

三年の東副部長の声には期待の気持ちが混ざっていた。

表情も期待に満ちて、俺の方に顔を向けてきた。

「なあ、浩一！ お前に期待してるから”全勝”してこいよ？」

「キマシタイ無問題東副部長 後は後輩の俺に任せて下さい」

本郷部長が座る横で、柔軟運動をしていた腕を解き、竹刀を持って試合場へと足を運ぼうとした時・・・

「すまない武田。大将まで回してしまうとは大変かもしれないが頑張ってくれ」

「全部勝てとは言わ無いからせめて二人ぐらいは・・・」

他の二年先輩の新山先輩と清水先輩から謝罪や悲願を言われたが、

「へっ？ 全員に勝てば問題ないんじゃない？」と答えると二人は口を開き若干冷や汗を掻きながら。

「「いやあ、全員って……(汗)」」

と二人が驚いていると……

「「浩一にーちゃん！」」

そこに大きな声で呼ばれ、振り向くと俺の大切な弟と妹の裕太と鈴。

まだ、小学低学年で可愛い年頃だもんなあ。

期待の言葉を掛けながら手を振ってくる二人に俺も笑顔で手を振った。

「浩一にーちゃん、ガンバレ！」

「五人抜きー、五人抜きー！」

「五人抜きって……そんな簡単に……」

「大丈夫です！ 絶対勝ちを掴んできますよ先輩！ 絶対、大丈夫
ツスー！！」

本郷部長や東副部長以外の部員は無理だろうと思っているだろうが、俺は弟と妹の応援に答える為に拳をグツと握った。

「その意気だ浩一。存分に暴れてこい！」

「本郷部長！ そんな言い方しなくても暴れてきますよ！」

「そうか。油断せずに行け」

「了解っす」

本郷部長から激励をもらい、絶対に勝つと心に誓う。

<東城高校一年 武田 浩一選手>

「はい！」

アナウンスに呼ばれ、返事をして前に出て竹刀を構える。

「始め！！！！」

審判の音が響く。

それと同時に踏み出した俺は、一瞬で相手に突きを放ち一人目を倒した。

続いて、二人・・・三人・・・四人・・・と電光石火の如くなぎ倒した。

「さすが、浩一。まあ、教えている俺や本郷はすでに追い抜かれるかも分からないが、四人も抜くとは篠崎先生の弟子だけはあるなあ」

「まだ、アイツの実力は序の口だ。只、俺達は基礎を教えているだけで、日頃から真面目に取り組んでいる上に・・・篠崎先生やOB先輩方の特訓のおかげでもあるんじゃないのか？」

「武田って。あの地獄のシゴキを受けているんですか？」

「そうだ。あの特訓をこなすアイツの根性と日頃の頑張りがここまでの強さの秘密だろう」

「うへえー。武田の奴どこまで強くなるのか俺らには想像もつかないぜ」

四人の先輩がそんな話をしていると知らない俺は、最後の五人目を小手打ちで決め見事五人抜きをした。

俺の顔には嬉しさがいっぱいあった。

礼をして、ベンチの前までやってきた俺は防具を外し、汗で濡れた

顔を腕を軽く拭った。

「ナイスだったな。浩一」

「あ、ありがとうございます・・・ブッ!？」

本郷部長にお礼を言おうとしたが、顔に冷たいタオルを被された。

東副部長が投げたモノだった。

「な、何をするんですか!!」

「ははっ、それで顔を拭け・・・俺達は先に外で待ってるぜ」

「えっ、ちょ・・・東副部長!!」

東副部長はさっさと背を向けて、他の先輩方と去っていった。

いつの間にか裕太と鈴木もゲート付近に降りてきていて、東副部長を追っていった。

疲れがドッと出てきた俺は家に早く帰ろうと考えていた。

一時間後。

く上尾市・商店街沿い

「PM04:38」

あれから、現地解散した俺達は裕太と鈴と東副部長の四人で商店街沿いを歩き家へと帰宅している最中で、鈴を自転車の後ろに乗せ押している俺の横で、東副部長は裕太とじゃれていた。

「すみません、東副部長。荷物のいくつか持たせちゃって」

「別にー？ 大丈夫だ。OB先輩の特訓で毎日鍛えているからな」

東副部長は、裕太達の荷物を持っていても気にするなと言うけど、俺は東副部長に心の中で「ありがとうございます」と静かに感謝した。

「でも、ホント浩一にーちゃん・・・カッコ良かったよね」

「浩一にーちゃんの五人抜き！」

「あれは、俺でもできるか分からない位息を飲む試合だったな」

三人から試合のコトを誉められ、内心照れながら三人に笑顔を向け

た。

「でもこれで全国大会初戦突破！ 休んでたアルバイトも明日から復帰してこの調子で次の試合も、バンバン勝つぜ！」

「意気込んでるところ悪いが浩一。バイトのシフト表の期限が明日までだから早めに出さないと店長がシフトを組めないってボヤいていたぞ」

「やべえー。ここの所部活で休んでたからシフト表の提出忘れてた。家に帰ったらバイト先に提出しに行かないと怒られるな」

「浩一にーちゃんらしいね。一つのコトに捕らわれると時々忘れるもん」

「そりゃないぜ」

俺の囁きに三人は笑った。

「話変わるけど浩一にーちゃんが全国優勝したら、うちの道場に沢山人が来るかな！」

「おー、裕太。それ俺も思ってたぜ」

「あはは、裕太も東副部長も冗談きついですよ。俺よりも強い奴なんてまだ見ぬ世界には沢山いるってじいちゃんも言っていましたから」

俺は二人が褒めてくれるのは嬉しいけど、自分よりも強い人なんてこの世界には数え切れないモノ達がいるのだからと内心心躍らせながら、この熱い衝動を誰かに伝えたいとも思っていた。それと、まだ見ぬ強敵に挑む前にじいちゃんを負かさないとコトには、全ては始まらないと思う。

「俺がじいちゃんに勝てるまで、後どれ位基礎を繰り返せばいいのか想像もつかないな！」

「まあ、頑張るのもいいが体を壊さないように無茶だけはするなよ」

「分かってますって、体を壊したら元も子もありませんからね」

「その意気なら明日からの訓練も少し増やして大丈夫そうだな」

「そこは、大目に見てほしいッス」

気合いを込めていた拳も東副部長の言葉に力が抜けてしまった。

本当に少しだけ叶うなら、訓練のレベルを上げないでと切に願った。

それから暫く帰宅路を歩いていると、電気店のウィンドウに液晶テレビが出ていて丁度ニュースが映し出されていた。

その内容は「神隠し」と放映されていた。

「まだ見つかってないんだ。この人」

「へっ？」

「ほら、前に汚職事件があっただろ？前の財務大臣の」

俺が説明すると意味が通じたのか鈴が思い出したようだ。

「あー。吾妻なんとかって言う人だったけ？」

「その人の子供が、数ヶ月前に行方不明になって未だに見つからないんだってコトだ」

東副部長が補足を述べた。

「へえ・・・」

「この御時世に神隠しとは、何が起きるか分からないものだな・・・」

裕太はそうなんだと納得している横で、俺は自転車を押しながら上の空で考えていると・・・

ブウン！

ドサア！

「あっ？」

軽トラックが通り過ぎ、裕太は何かが落ちた事に気がつき後ろを向いた。

「ねえ、浩一にーちゃん。落とし物を拾ったんだけどー」

裕太が、楽器を入れるような長方形のケースを持ちながら言ってきたので、交番に届けないと瞬時に思った。

「すみません、東副部長。ちょっと交番に寄りたい」

キキィッ！！！！

俺が、東副部長に交番に寄ると喋っていた途中に、車がアスファルトを擦ったような音が耳に届く。

裕太の居る歩道を振り向いた瞬間。

「裕太！ 東副部長、鈴をお願いします！！！」

裕太が車と衝突すると思い、自転車に乗せた鈴を東副部長に強引に渡し裕太の側まで迷わず全力で走り、ラクビー選手のボールを抱え込むような形で裕太を掴み反対側の人がいる道に投げた。

「浩一！！」

東副部長が俺の名を叫んでいたが、それが何故か印象的だった。

「浩一にーちゃん！！」

フオツ・・・カッ！！！！

鈴が叫んでいる最中、ケースが青い光を放ち俺を包んだ。

車は避けようとし、電柱に横転してしまったのが最後に見た光景だった。

この時は、まだ俺も気がつかなかった。

この一瞬の出来事が、俺の人生を大きく帰ることになることは

To be continued . . . |

第0・5話：プロローグ？（前書き）

主人公の相棒にあのポケモンを出してみたいと思い登場させたけど、何か書いていて何でこんな風仕上げたのかと思った瞬間でした。

第0・5話：プロローグ？

トキワの森

ボクの名前は、ピカチュウ。

ここトキワの森に住む電気ネズミで、いつもの様にリンゴの木へと向かっていた。

「今日もおいしいリンゴが、実ってるかな」

と熟したあの赤い艶つやの輝きを放つ果物を想像しただけで、気分は嬉しきMAXになり早く食べたいと思う。

リンゴの事で、頭一杯に考えていると目的地のリンゴの木に到着した。

「ふう．．．やっと着いた。今日は五つ位は食べて残りは夜食に持って帰ろう」

取り合えず今日の食べる分は、それくらい食べようと意気込み、早速．．．目的の物を手に入れようと素早く跳躍して木に登り、手短な枝へと移動した。

枝の上から一番熟したリンゴを探し出す事、数分後。

「いつ見ても惚れ惚れする輝きだな」

木の幹に体を預け、見つけた物を手に取り思わず口にした。

「じゃあ、いただきます」

手に持ったリンゴをいざ食べようとした時、突然強い突風が吹いてきた。

ビュウ！

「うわぁー、もうボクがせっかく最大の楽しみを食べようとしていたのに、ドコのヤローが邪魔しやがったのかな（黒笑）」

ボクの楽しみを邪魔するモノは、例え伝説や幻のポケモンだろうと
YO・U・SYAしないよ！！

ガサ・・・ガサ！

ボクが、黒いコトを平然と考えていると少し離れた所に居るポケモ

ン達がガタガタと震え森の奥へと離れていく音が聞こえたけど、気のせいだね。

よく仲間や友達から、黒いと言われるけどそんなに腹黒かなあ。

こんなに見た目が、可愛く愛らしいのに失礼するよね。

「それよりもボクのリンゴは、どこに在るのかな」

キョロキョロと辺りを探すとさっきの風で、飛ばされたリンゴがコロコロと光っている穴へと入っていた。

「チッ」

神様って、ホントーにボクの事を嫌ってらしいね。

面白い

そんなにボクを怒らせたのなら、10万ボルトやかみなりやボルテッカーで虫の息になるまでI・Z I・M Eてあげるよ

「さてとあの光の穴に入ったリンゴを早く見つけに行こう」

ボクは、迷わず光の穴へと駆けだした。

「待ってるよ。ボクのリンゴ」

ウキウキしながら、光の道を走る。

この光の道を抜けた先に必然的に出会うボクのトレーナーに会うとは、この時はリンゴのコトだけで想像もしてなかった。

T o b e c o n t i n u e d . . . |

第0・5話：プロローグ？（後書き）

これからも時々黒く書いて逝きたいですね

第1話・相棒との出会い！！ ～聖剣はお昼寝中～ (前書き)

やっと書き終えたので、投稿します。

第1話：相棒との出会い！！ ～聖剣はお昼寝中～

Side 浩一<こっいち>

「妖精の楽園”悠久の洞窟”」

ピッチャー！！

と水の落ちる音が耳に聞こえた。

「う……………ん……………」

意識を取り戻し目が覚めたら、そこは浅い川の近くで俺は地面に横になって寝ていたようだ。

って言うか……………ココどこだよ？

俺は、誰？

俺は、浩一……………よかった。

名前は忘れてなかった。

いや、当然だけど。

つか、さっきまで歩道に居たよな・・・？

なんで、俺こんな所に居るんだ・・・？

あの時、車に跳ねられそうになって近くにあったケースが光ったハズだったな？

「・・・・・・・・目覚めてから、そんなに時間経ってないけどこんな場所に来る道理ってまずないよな・・・」

俺があれこれ考えていると何か目の前を妖精が、「わたしを追い掛けて〜」って言わんばかりにヒラヒラ飛んでる。

ここは素直に従うべきか？

いや、でもそれじゃ俺が痛いキャラになっちゃっただろ。

幼稚園児か小学低学年位ならまだしも、そもそも高校生でそんな事をやったらマジお笑いモノだ。

「・・・・・・・・・・」

考えても始まらないし、終始無言で妖精を追い掛ける事にした。

ここに居ても帰れるワケじゃないだろうし？

兎に角、人の居る所までいけばここがどこだか分かるかもしれない。
俺は、近くに落ちていたスポーツバックと竹刀袋と例のケースを持って妖精を追いかけた。

それで、妖精を追いかけて数十分……

「えっと、何でピカチュウが血塗れのバットを持ってるんだ!!
それに、その横に倒れている血塗れの白い物体って何だよ!？」

今の状況を再確認して、何このサスペンスホラーって思うよ？

目の前には、どう見てもあの有名な人気者のポケモンでもある黄色の電気ネズミ『ピカチュウ』だよな。

その小さな体に不釣り合いな血塗れのバットを持ってなかったら、可愛いと思うけどさ。

……それよりもポケモンが居るこことて、洞窟だからカントー地方のお月見山辺りか？

今更かも知れないけど、俗に言うトリップをして、ポケモンの世界に来たのか？

誰かに聞こうにも周りに人はいないし、ピカチュウが人の言葉を喋って答えてくれる分けないよな。

どうしようと思ひ再び考えていると・・・

「ねえ。キミ、そんな所に蔭って何してるの？」

「へ？」

下から声がした。

低くはないし、けれど高くもない。

まあ。どちらかと言えば少し高い方かな。

青年、というよりは少年といった感じの声だ。

下を向きいつの間にかピカチュウが、俺の足下に来ていてしかも人の言葉を喋った。

さらに、「キミ」という言葉は、明らかに俺に向けられて発せられたものだろう。

だって周りには、俺以外に誰もいない。

それよりも何て言って答えよう。

アニメ版のニヤースなら、義理堅いし話の分かる奴で喋っていても違和感ないけどさあ。

下手に答えようにもあの息詰まりそうな光景が、目に焼き付いて場違いにも殺人現場を目撃した人ってこんな感じで緊張した空気を味わうものかと思った。

「こんな所にボク以外に居るなんてトレーナーなの？」

「いや、トレーナーじゃないし・・・寧ろ迷い込んだ一般人かな？」

ピカチュウに話しかけられたので、話返すと微妙な表情で俺のコトを見つめてくる。

あれ、何か変な返答をしたのかと思いピカチュウの高さに合わせて腰を折って、彼の顔を覗き込むような形になり、コチラから話しかけた。

「何で普通に自分と喋ってるかと思うけどさ。取り合えずお互いに自己紹介をしてから此処が何処なのかとか意見を切り出さないか？」

「別にいいけど、ボクが人の言葉を喋ってるのに驚かないなんてキミって本当に一般人なの？」

「まあ、一般人だよ。それにこれでも顔に出さないで驚いているだけで、何よりも人間以外が喋れないなんて道理がこの世にないって考えてる方だしね」

「ふうん。変わりモノって言われてるばいね」

「よく言われるぜ」

俺は、そんなピカチュウの言葉に苦笑しながら答えた。

「それよりも改めて、俺の名前は”武田 浩一”だ。それで、キミはポケモンの”ピカチュウ”だよな」

「うん、そうだよ。ボクは電気ネズミの”ピカチュウ”で合ってる。で、浩一に聞きたいんだけど・・・ここがどこか知ってる？」

自己紹介を終えて、此処が何処なのかと聞かれて自分の知っている限りのコトや此処が違う世界だろうと言う考えを答えた。

「いや、気づいたらこの洞窟の中に居たからさ。カントーにあるお月見山の中だと思っただけど、此処に来るまでポケモンに会わなかったから、ポケモンの世界じゃない別世界じゃないのかと思うかな。

ピカチュウは何か知らないか？」

「ボクも浩一と同じで、光の穴の中に入ったリンゴを夢中で追いかけてやって来たから此処が何処か何も知らないんだ。気づいたら此処に迷い込んでいて、それから少し歩いた先に丘が見えて、そこに行く」とボクのリンゴを、シルクハットに着ただけを着た白いシヨボい奴が食べ終えていて、リンゴの残骸をボクに気が付かずに投げて

きて、それにムカついてSE・I・SA・Iをしてさあ。それが
終えた時に後ろから視線を感じて振り向いたら浩一がいて此処がど
こか知ってるかと思っただけ話しかけたんだ」

話を整理すると、ピカチュウも俺と同じく気がついたら此処にいた
というコトで、違うのは自分からこの世界に来たというコトだ。

粗方の経緯を聞き、キーワードになりそうな単語を頭の中で整理す
る。

”シルクハット”と”上着だけを着た”と”白いシヨボい奴”の三
つが、キーワードに当てはまるか。

うん？

何かさ．．．最近に自分が好きなアニメやマンガのキャラクターに
ピンときたのが、居たよなと思出す。

「あっ！」

ビクッ！！

「どうしたの？ 急に声なんて上げちゃってさ」

ピカチュウが急に俺が声を上げたコトを驚く中で、ポンと手を叩き、
持っていたスポーツバックからある本を取り出し、ピカチュウに見
せる。

「コレだよ。コレに登場するキャラだ!!」

「えっと、何なのその本？」

「これは、『SOUL EATER』ソウルイーターっていうマンガのガイドブックで、この『超GUIDE BOOK』にピカチュウの会ったキャラのコトが詳しく書いてるんだ」

俺の持っている本をピカチュウに見せながら、早速・・・目的のページを開く。

ピカチュウは、俺の肩にいつの間にかよじ登っていて開いた本のページを覗きこむ形で見ている。

「コイツだろ。ピカチュウが会ったっていうキャラは」

「うん。コイツで合ってるけど、ココにも書いてるとおりホントーにウザい奴なんだね」

「まあ・・・ピカチュウの言うコトも、もつともだけどさ。俺はそんなにコイツ自身を嫌ちゃいないぜ!! 誰が何の目的で製作したか気になるし、”旧支配者<グレード・オールド・ワン>”って呼ばれる一人で、凄い力の持ち主でもあるんだ」

「ふーん。それってどれ位凄いの？」

ピカチュウは、疑問に思ったコトを聞いてきたので簡潔に答えた。

「ピカチュウの住む世界に居る．．．幻や伝説のポケモン達と同じ位凄いつて想像してくれればいいよ」

「うわぁー、それってスゴく強い奴ってコトなの。あまりにも簡単にホームランバットで撲殺できたから弱いつて思っっちゃたけど」

今、もの凄いコトをあっさりと言ったピカチュウは黒い子だなと思っただのは秘密だ。

「って言うか、”ホームランバット”と言えば『スマブラシリーズ』の攻撃アイテムだったハズだ。」

何でピカチュウが持つてるか謎だけど、もしも他にも色々なアイテム持っているなら、後の展開の『SOUL EATER』で役に立つかもしれないな。

スターやマキシマムトマト等が、あれば予想外のコトが起きてても対応できそうだし、原作で死ぬハズの人とか助けられかも知れないもんね。

色々思考を巡らせながら俺は、俺の代わりに死んでしまったあの人に言っただ言葉を脳内で思い出していた。

「助けられるのなら、自分がどんなに傷ついても手を差し伸べて相

手を救いたい」

と言う誓いの言葉を声明に思い出していた。

それから、ピカチュウと色々と話しながら、コレからのコトを話したり、持っているアイテムを見せてもらい、いくつか譲ってくれて感謝した。

にしても眠くなってきたから、今日はもう早く寝るコトにしよう。

T o b e c o n t i n u e d . . . |

第1話・相棒との出会い！！ ～聖剣はお昼寝中？～（後書き）

オマケ

「そつえば、エクスカリバーって起こさないでいいのかな？」

「今更だけど、アイツを起こさなくても知りたい情報なら浩一の持つる本で、把握したからいいんじゃないの。それよりもこの本に登場するブラック スターやキッドって子達が聖剣と出会う話は笑えるね」

「もう3巻まで読んだんだ。俺は17巻での性別が逆になる話でソウルやブラック スターの女の子Verは可愛いつて思うな」

只今、俺達はスポーツバックの中に入れていた『SOUL EAT ソウルイ
イターER』を楽しく読んで語り合っていた。

聖剣のコトを完全に忘れていて、起こしたのは翌朝で、ピカチュウと朝飯を食べている時に思い出したのはお約束だったぜ！！

第1・5話・さらば、エクスカリバー！！ キミの事は忘れないよ？ く玩具の

こんな感じで、仕上げて見ました。

第1・5話：さらば、エクスカリバー！！ キミの事は忘れないよ？ 〈玩具の

Side ピカ

〈妖精の楽園”悠久の洞窟”〉

朝早く起きたボクは、まず始めに綺麗な水場を探して顔を洗い、次に小高い丘近くの地面に寝ていた浩一を起こして、ボクが顔を洗った水場を教えその間に軽く朝食の準備に取りかかる。

前にスマブラの世界に渡った際にマスターやクレイジーから『異次元ポーチ』を貰い、その中にある世界で手に入れたアイテムやボクの住んでいた世界の木の実とリンゴといくつかのアイテムとかを入れているんだ。

献立は、ボクの得意なフルーツの盛り合わせを作り始める。

ピーチ姫やマリオやルイージ達から、料理は一通り教わっていたので割と時間は係らずに出来上がった。

後は、浩一が来るのを待っているだけなのでココに住んでいる妖精から飲んでも大丈夫そうな湧き水が流れている場所を聞いていると浩一が帰ってきた。

浩一に水筒か汲むコトのできる容器を持っているかと聞くと水筒やペットボトルを持っているらしくて、二人で汲みに行った。

それから、ボク達は少し遅い朝ご飯を食べ始めた。

「にしても、マキシマムトマトって苺っぽい味がするとは想像もしてなかった」

「そうかな。でも、美味しいでしょ」

「そりゃ美味しいよ。これに練乳や砂糖とかをかけたらもっと美味しくなるハズだ。ピカは何かをかけたたりしないのか？」

「うーん。そういうのはかけたりしないね。ボクは何もかけない方が食べなれてるから、このまま食べるのが一番好きだよ」

とまあ、マキシマムトマトやリンゴやオレンの実や浩一の持っていたブロックメイト（メイプル味）を朝ご飯代わりに食していた。

人間の食べ物って、あまり食べたコトはないからいざ食べて見たら新鮮で新しい食感を味わったよ。

これには、ボクの中で革命的な出来事だった。

例えるならリンゴをそのまま生で食べるより、少し工夫するだけでこんなにも斬新な味がするものだとボクの中では衝撃的なコトだ。

前に跳ばされた世界じゃ味わって食べるコトなんてあまり出来なかったから、この世界では色々な料理を食べ歩きたいな と頭の中で考えて、ボクは浩一にこの世界の美味しい料理や名物がないのかと尋ねた。

「ねえ浩一、この世界で美味しい料理や名物とかがって知らないかな？」

「そうだな。この世界は俺の居た世界と何ら変わらないからある程度は分かるけど、そこまで詳しくは知らないな。美味しい物を食べるならイタリアやロンドンやパリとかに原作でも訪れるから、有名店とかをネットや本やパンフとかで調べておくからその時にでも一緒に食べに行こうぜ！」

「うん、それまでに美味しい料理店を調べておいてね」

「任せておけ、俺も本場のグルメを食べたいからって言う理由もあるし、調べるのは嫌いじゃないからね」

浩一は、あまり有名店とかを知らないらしいけど原作で訪れる場所に美味しい料理を提供する場所をネットや本やパンフ等で調べてくれるとのコトで、ボクは今から食べに行くコトが凄く楽しみで浩一ならきつと美味しい料理店を見つけてくれると思った。

「あれ？　そう言えばイタリアやロンドンは、5巻まで読んだから訪れるコトは分かるけど・・・パリに訪れる話って在ったけえ？」

「ああ・・・それは、ドラマCDでの話でだいたい4巻と5巻の間辺りの番外編で、死武専の特別社会科見学でパリにマ力達が訪れて、そこにとある魔女の陰謀に巻き込まれるって言う話だ」

「ふうん。それじゃあボクたちも死武専に入学したらパリに行くコトってできるのかな？」

「そこまでは、俺にも分からないな。ドラマCDの方もコース選択はグループ事によって違うし、全部で四つのコースの中からグループで行きたい所を選び最終的に投票とかで決めるかもしれないな。まあ．．．最もどこ行くかは人によっては異なるだろうから、確実にパリに行くならマカ達のグループに入れてもらえば100%の確率でパリに行けるはずだ」

「なら、マカたちと行動を共にしていたらパリに行けるんだね」

「はあ、パリに旅行できると思うとこの世界に迷い込んだのも悪くないかも、それに浩一ならボクのトレーナーとして組んでもいいんじゃないかと思う。」

「まだ、会って一日だけなのに何故かボクの住んでいた世界に居るあの子」と同じ雰囲気を感じがするんだよね。」

「あのさあ、朝食を食べる前から思ってたんだけど．．．そろそろ”アイツ”を起こさないでいいのか？」

「ボクが、考えている最中に浩一が話しかけてきたので一旦思考を停止して、浩一が指を指した方向を見る。」

「そこには、昨日ボクがボコボコにしたウゼエ奴が何処からか取り出した布団の中でスヤスヤと眠っていた。」

その姿を見ると何故か無性に腹が立ち、昨日ボクのリンゴを勝手に食べた奴がノンビリ寝ているなんて神様が許してもボクは許さないよ

「クス（黒笑） この駄剣は全く反省していないみたいだね」

「えっと・・・ピカ、取り合えず冷静に・・・冷静になろうよ」

「ボクは、いたって冷静だよ。この駄剣を少しSHI・TU・KEするから浩一は見ない方がいいよ」

「・・・分かった！？ 後ろ向いて耳を塞いどくから終わったら教えてくれ（汗）」

浩一が、後ろを向き耳を塞いだのを確認して、ボクは『異次元ポーチ』から市販で売られている玩具の『ピコハン』を取り出した。

「さて・・・久しぶりにやるか。名槌”粉艦マー”・・・またの名を叩鋼つぶがね、卍解！」

ボクの持っていた”粉艦マー”の打撃部分が数十メートルはありそんな巨大な鎚に変化する。

そして、”粉艦マー”を健やかに眠っている駄剣へと振り降ろす準備が完了して一気に目標へと振り降ろした。

「駄剣エクスカリバー、黄泉へと墜ちろおおおお!!!」

ドゴーン!!

「ギヤアアアアアアアアアア!!?」

辺り一帯が、小さなクレーターが出来る位に力をセーブして、振り降ろしその後何か悲鳴の様な声が聞こえたけど気にしないコトにして、駄剣エクスカリバーへのSHI・TU・KEは無事終わり、ボクは浩一の居る所へと戻った。

「いやぁ・・・いい仕事をしたなあ」

「・・・何て言うか。お勤めご苦労様?(汗)」

浩一から労いの言葉を少し冷や汗をかいた状態で貰った。

そんなに怖いコトを平然とやったのが、いけなかったのかどうか? マークを浮かべながら午前中の時間が終わりを告げた。

To be continued... |

第1・5話：さらば、エクスカリバー！！ キミの事は忘れないよ？ く玩具の

オマケ

あの惨事後、エクスカリバーはギャグ補正のおかげで生還したらしいが、もの凄く性格が180°変わりピカのコトを『ピカ様』って呼んで土下座していて、今後ピカを怒らせてはいけないと暗黙のルールを自分の中で作り、これから仲間になる人や親しくなった人達にはピカの目を盗んで教えようと静かに心の中に誓った。

主人公の設定

【主人公の設定】

Name: 武田 浩一 (Takeda Kouichi)

Sex (性別) : 男

Age (年齢) : 16歳

Birth day (誕生日) : 8/10 [獅子座]

Blood type (血液型) : O型

Height (身長) : 168.4 cm

Weight (体重) : 47.3 kg

Foot (足の長さ) : 26.5 cm

Handedness (利き手) : 両利き

The first person (一人称) : 俺 / 自分

職業 : 高校生 / ????

所属 : 東条高校1年A組 / ????

部活 : 剣道部 / ボランティア部

流派：武田流剣術、我流唐突術、暗殺術

武器：改造竹刀「雪風」（彼の叔父であるジエムーズの手により一般の竹刀が、魔改造され機械仕掛けのモノと成るが、形状はなんら普通の竹刀と変わらず重さに関して多少し重いと感じる位で、それらはジエムーズの技術の賜物であり、孫の浩一専用^{フイスター}に長さ^{フイスター}と重さ等は調整されている。序でに噴射装置や自爆装置に加えレーザーサイトやフォアグリップ等が付いていて、もはや原型の竹刀とは言えない代物と化している）、竹刀（こっちは、一般の竹刀だが武田家と古くから馴染みのある店のお抱えの職人の手により作られたので、強度は一般のモノと比べて丈夫に作られている）

防具：通っていた高校の制服ハイメージは、「シャイニング・ウインド」の主要キャラクターのキリヤ達^{キリヤ}が通っていた「聖ルミナス学園」高等部^{キリヤ}が着る学制服（因みに防弾チョッキ並の仕様に叔父の手が加えられているので、一般の学生服より丈夫な作りとなっている）

趣味：修行、月見、読書（ラノベ系、マンガ）、ゲーム（アクションRPG、シミュレーションRPG、RPG、音ゲー、パズル、カードゲーム）、アニメ&映画鑑賞、サイクリング、ウィンタースポーツ、冒険、機械いじり

特技：剣術、体術、料理（和食と洋食が得意）、お菓子作り、ピッキング、発明

FAVORITES（好きなもの）：身体を動かすこと、朝の道場の空気、家族全員、部活の先輩やメンバー、ピカ、エクスガリバ、アリア、ポケモン、マカ達職人&魔武器メンバー、死武専組メ

ンバー、ミフネ、アンジュラ、クロナ、ラグナロク、フリー、動物
(特に猫と犬とハムスターが好き)

DISLIKES (嫌いなもの) : シュタイン博士の解剖実験に
されるコト、エクスカリバーの朗読会、メデューサ、ノア一味、煙草

好きな食べ物 : アイス類、お菓子 (主にチョコレートやクッキー
全般が主に好き)、和食&中華&洋食の全般、サラダ類、オニギリ、
豚汁、お好み焼き、鍋料理、パスタ全般、ピザ (とある魔女と呼ば
れる少女並みに好物)、麻婆豆腐 (某運命に登場する神父好みの辛
さが特に好き)、B級グルメ

嫌いな食べ物 : ゲテモノ料理

性格 : 冷静で、運動神経抜群。自分よりも大切な人や家族や友達
が最優先。

そのため、家族を愛し、家族みんなの幸せを願う気持ちは人一倍強
く、そして、何よりも困ってる人を見かけらすぐに助けたいといち
早く誰よりも早く動く。(イメージに近いのは、デジモンクロスウ
ォーズの主人公「工藤タイキ」の様に困っている人を放つとけない
性分。お人好しな所ですね)

また、「家族との絆」を誰よりも大切にしている心優しい人物でもある。
常に前向きで様々な人や動物ともすぐ仲良くなれるので、仲良くな
った相手に主に子供によく懐かれています。

口調は「ス」を癖で最後に付けて、家族や親しい相手や心から許
せる人と話すが、それ以外の相手とは敬語等で喋る。

常日頃にヘッドホンを付け音楽を聴いている。

強運の持ち主でもあり、宝くじ等を買うと必ず当たると噂される。

もう一つ、「モード」と呼ばれる性格があり、あるモノ（・・・）を目にすると自然と頭のスイッチを切り替えて、そのモードになる。

容姿：黒髪で、長さはセミロングである。

瞳の色は両目とも母親譲りの紫であつたが、世界を渡つた際に右目だけが翠眼へとなつていて本人はピカに言われるまで気づいてない。

そして、髪の方も前髪の一部だけ赤のメッシュへとなっている。

さらに、祖母である舞夏の中に流れるとある種族の血を武田一族の中で誰よりも濃く受け継いでいて、時折発作や貧血を起こしたりするが、世界を渡つた為により激しく起きる事になる。

それ以外に、頭の額に小さな傷があり幼い頃にある事件に巻き込まれ出来てしまい、コレを直さないのかと家族から言われるが、「自分の過去の出来事を忘れない為に遺しておきたい」と本人は語る。

*イメージキャラは、『うみねこのなく頃に』のワイラド・H・ライトである。

服装：その日の気分で、服装を決めて着る。

他には、学生服がお気に入りで休日でも着て過ごしたりする。

アクセサリー：余り余計なモノは、身に付けないが伊達メガネや腕時計<シルバースクエア>だけはお気に入りで身に付けている。

備考：平行世界の一つである「地球」の出身で、何の因果か「ソウルイーター」の世界へと渡った。

幼い頃に浩一の中に流れる血のせいで謎の組織に誘拐され、体を改造されあるモノを右手に無理やり埋め込まれ、そこでの実験と名ばかりの殺し合いを経験する。

大切な友達や仲間を自分の変わりに死なせてしまった過去の持ち主でもある。

後にその過去の出来事が、この世界で再度思いだし彼の中にある闇を増幅させ” の狂気”へと変わる。

また、謎の組織のメンバーとも再会したり、この世界に持ち込まれた『物』や『 の遺産』と呼ばれるモノを回収、もしくは破壊するように浩一達を必然的に招いた人物から依頼される。

表の實力は、過去全国大会にて優勝三連覇を中学生で成し遂げたレベルである。（表では、祖父達の教えでそのように周りのレベルに合わせて、少し上に設定している）

裏の實力は、あまり知人や他人には知られたくないので、家族と親しい人物以外には教えていない。

実戦に関しては、祖父の教えを子供の頃から受け続け雪山や沼地等の過酷な場所で真剣を用いた命がけの修行を十年間やり遂げた者で、武田道場内で有名である。

裏設定：武田家19代目当主として家督を13歳の元服した時に継ぐことになっていたが、本人はその事についてあまり乗り気では

なくて、「自分の将来は、自分で決めたい」と祖父に進言し、「18歳までにその？道〃夢？を見つけ証明して見せる」と言う条件を祖父と約束をしている。

祖母とは「もし家督を継ぎたくないなら、せめて彼女を作ってきてね」と軽く沈黙の黒笑み（別名：サイレントブラックスマイル）で脅迫染みた命令をされている。

因みに母親と父親以外に祖母の血を色濃く受け継いでいて、その血の影響で生まれた時から常人以上の身体と運と戦闘の三つの能力を所有しているが、同時に呪い（・・・）と呼ばれる爆弾持ちでもある。

ピカチュウの設定

【ピカチュウの設定】

Name:ピカチュウ(Pikachu)

Sex:

Age:不明

Birthday:不明

Bloodtype:不明

分類:ねずみポケモン

タイプ:でんき

特性:せいでんき

Height:0.4m

Weight:5.4kg

Foot:不明

Handedness:両利き

The first person: ポク

職業: 浩一の相棒 > パートナー <

流派: 不明

武器: 名槌「粉艦マー」 別名: 叩鋼つぶがね「スマブラの世界で、偶然手に入れた代物であり、正解が出来ると言う。今まで誰一人使い手がいなかったが、ピカが手にしたコトでその姿を現す。主にO・S・I・O・K I専用として使うが、機嫌が悪い時など戦闘時に使いストレス発散としても使用する」
ホームランバット、レイガン、ビームソード、ハリセン

防具: 無し

趣味: リンゴの新しい食べ方の研究、旅行、DVD鑑賞

特技: 体術、料理（フルーツの盛り合わせやサラダ類が得意）
お菓子作り

好きなもの: 家族、浩一、エクスカリバー「舎弟1号」
下つ端的な意味で好き(?)」
アリア、弟であるレッドのピカチュウ、浩一の所有するポケモン（まだ、メンバーは謎だが一匹だけ自身の知り合いであるポケモンが混じっているとの噂がある）
死武專組メンバー、アンジュラ、ラグナロク（後にピカの怒りを買って、舎弟2号にされる）
フリー、カツラ、レッド、麦わら帽子の少女

嫌いなもの: シュタイン博士の解剖実験にされるコト、エクスカリバーの朗読会、メデューサ、ノア一味、自次、ロケット団

好きな食べ物：リンゴ全般、お菓子（主に菓子パンやマフィンが主に好き）、和洋中全般、オニギリ、マキシマムトマト、木の実全般

嫌いな食べ物：激辛料理

性格：温厚で一見大人しそうな感じのポケモンではあるが、切れると黒い笑みを浮かべ「名槌」粉艦マー」を使いジエイン顔負けの如く相手を世界の果てまで追いかけて叩き潰すと殺されかけた某とある駄剣氏は語る。

また、何よりも”絆”を大切にすることを元いた世界で弟をゲットしたトレーナーや麦藁帽子を被る少女から教わったり、人やポケモンを気遣うなど優しい一面もあり、面倒見も良く元の世界や「スマブラ」の世界での経験で団体行動する際はまとめ役となり、浩一のアシストを勤める。

元いた世界では、他のポケモンから好かれることも多かつたらしいが、本人は鈍感な為にその好意にはまったく気づかなかつた。

ステータスは飛び抜けて通常のピカチュウや他のポケモンを圧倒的に上回り、LV：100をも越えているチートポケモンと後に浩一達は知るコトになる。

そして、大切な人や仲間や友達が困っていると浩一同様に放つけない質である。

容姿：アニメ版の「ポケモン」に登場したサトシのライバルの一人、ヒロシの「ピカチュウ（愛称：レオン）」の様に前髪が八ネている。

アクセサリー：余り余計なモノは、身に付けませんが赤や青のスカーフだけはお気に入りで身に付けている。

備考：平行世界の一つである「ポケスペ」の出身で、必然的に「ソウルイーター」の世界へと渡る。

幼い頃から弟のピカチュウ（レッドのゲットしたピカチュウ）と共に暮らしていたが、ある日トキワシティに1人で出かけた時にロケット団のボスであるサカキに捕まり、その後様々な実験と称してバイオ手術や戦闘訓練を受けるが、グレンタウンのジムリーダー「カツラ」と共に脱走し、ミュウツー戦にて弟と再会する。

喋れるコトに関しては、実験の成果にて人の言葉を話せる様になった。

その後、レッドと弟達と共に旅をしたり、トキワの森の不思議な力を持つ少女と出会い、一緒に暮らしたのが彼の経緯である。

「ソウルイーター」の世界では、浩一のパートナーとして共に戦う。

強さは、通常のピカチュウよりも電撃の威力は強力で一騎当千とされ、ホームランバットを使えば『トップをねらえ！』に登場するガバターの武装の一つ『バスターホームラン』が自分の技として何故か使える。

さらに「黄色のデスネズミ」の異名をロケット団三幹部の中隊長達から呼ばれたコトもある。

第2話：？魔道具？って、某ネコ型ロボットが出す道具と思ったよ！！ くそや

新年初の投稿です。

第2話：？魔道具？って、某ネコ型ロボットが出す道具と思ったよ！！　くそや

Side 浩一<こついち>

く妖精の楽園？悠久の洞窟？く

前回、と言うか一時間前の話だけど『聖剣エクスカリバー』へのS
E・I・S A・Iを終えたピカが、スツゴクすつきりとした顔で俺
の所へと戻ってきた。

その表情は自分の生きてきた中で、子供がトラウマになるんじゃない
のかと言うレベル的な印象だった。

こんな話題は止めて、違う話題を話そう。

何故？ピカチュウ？の事を？ピカ？と呼んでいるかだが、俺がポケ
モンシリーズのゲームをしていた時に育てていた？ピカチュウ？に
愛称？ピカ？と名付けていて、その話をしたら「だったら、ボクの
コトを？ピカ？って言う。その愛称で呼んでほしい！」と言われ、
俺は愛称で呼び・・・ピカも俺の名前の方で呼びお互いに親しく名
前を呼ぶ程の仲になった。

まだ一日しか経ってないのにふと思う。

ピカとは、昔から一緒に居る兄弟のような感じがするんだ。

そついう風に思うと裕太や鈴のコトを思い出す。

あんな別れた方をして、二人とも俺のコトを心配してるだろうし、今頃．．．無駄に若作りの父さん？冬弥？や外を歩けば10代後半と間違われナンパされたりするフランス生まれの母さん？エリカ？や今だ現役で家の武田道場師範代にして無類の強さを誇る祖父？信玄？や年齢不詳にして見た目10代前半で小学低学年と間違われて365日必ず警察に補導されかけられる祖母？舞夏？や豪快で男勝りな「東条のロリトラ」と呼ばれる？美希？義姉さんや薙刀部の1年エースでもある幼馴染の？さつき？や他にエリカ母さんのお兄さんである？ジエムーズ？叔父さんや叔父さんの兄妹でもある11人の姉さん達に裕太と鈴が、消えてしまった俺のコトを話して警察とかに捜索願いとか出してるかも、東副部長にも心配かけてるだろうけど、あの人なら再会した時に「超スツゴク甘い菓子を作れ！！」って言う命令を出してくるだろう。

因みに東副部長さんは、『銀魂』の？銀さん？や『魔法少女リリカルなのは』の？リンディさん？を越える程の超甘党で、浩一さんの通う東条高校でもそのコトで有名人であり随分前に市内のとある有名甘味所で、超巨大DXパフェを30分間で食べきれたら無料を成し遂げられ、さらに様々な甘味所を制覇した猛者として、市内に止まらず全国の甘味所をも制覇したとか言う噂が、東条高校の新聞部にネタとして取り上げられました。

後、浩一さんの家族や叔父さんやお姉さんズやお義姉さんや幼馴染

さんについては、また機会がある時にでも電波ジャックして紹介したいと思います。

以上が、私が仕入れた裏ネタ情報でした

by:とあるアナログテレビより

「・・・はっ!?!」

「どうしたの? 浩一」

今、妙な電波が脳内に流れ、ピカが「どうかしたのか」と聞いてきた。

「いやあ、なんか頭の中で妙な電波を受信した様な気がしてな」

「ふうん。ボクはそんなの受信しなかったけど、きっと気のせいなんじゃない」

「そうかな?」

ピカの言うとおり、たぶん気のせいだろうと考えた。

気を取り直して、俺はあの惨事から復活した聖剣エクスカリバーに、
？あの人？と？アレ？について知っている限りの情報を聞き出して
いた。

「エクスカリバー、800年前の？死神八武衆？の生き残りである
貴方に聞きたいんだけど、？エイボン？と？BREW？と？エイボ
ンの書？について知っている限りの情報を教えてほしい」

「ほう！ かの？大魔道師？と？波乱？と？書物？について私に
聞くとは、キミはずいぶんと大胆なコトを尋ねてくるのだな。それ
を聞いてどうするのだね？」

「質問を質問で返さないでほしい。俺は貴方の持つ情報とコッチの
知っている情報を照らし合わせ、この？世界？が俺の知っている？
世界？なのかどうかを確かめたいだけだ」

この？世界？が、自分の知っている「原作」か「アニメ」の世界な
のかを確かめるには、？大魔道師「エイボン」？と？魔道具「波乱
（通称：BREW）」？と？魔道書「エイボンの書」？の三つのキ
ーワードが、鍵となりアニメ版や原作版でも？元・死神八武衆？の
一員で、平和のために魔道具の開発を進めていたけど、魔女アラク
ネの誘惑に乗せられて、2人の研究を統合して「BREW」が生ま
れた。

アニメ版では、その行いを悔いた彼は「BREW」の封印の鍵とな

る魔道具『エイボン』を作成してその中に自分の魂を宿らせたのがアニメ版のオリジナル設定で、原作版には、目次が言っていた「エイボン様は自分を封印なさった・・・」と語っていたけど結局の所は彼の生死については不明とされていて、彼が自身の研究や開発した魔道具について書いた物の総称を魔道書『エイボン』と呼ばれていて、それら？本？と？写本？の二冊を遺しているんだよね。

その内の一冊である？本？の方を所有している？魔道師？と名乗る？アイツ？が存在しているかによって？物語？の流れが大きく異なってくる。

それと忘れちゃいけないのが最高傑作と呼ばれる魔道具『BREW』^{ブリュー}で、これについてもアニメや原作でも設定が異なり未だに機能や詳細は謎に包まれているんだよね。

「簡単に教えるコトはできんが、私の出す『課題』をクリアできるのであるのならば教えてもよいぞ」

「その条件ってなんですか？」

どんな課題を出すのか尋ねるとエクスカリバーは、不適な笑みを浮かべゴソゴソと服の内ポケットを探りながら、ドコからともなく何ら変哲もない全身黒一色の人形を取り出してきた。

「というワケで、魔道具『影人形』！！」

「・・・お前は未来から来たネコ型ロボットか・・・？」

「同感だね」

今まで黙っていたピカも俺と同じ気持ちで頷いたらしいけど、「あの作品を知っているのかよ！！？」と俺は、ピカにもの凄くツッコミたかったけど気にしたら負けの様な気がして、平常心を装いながらエクスカリバーへと顔を向けて彼の手に持つ人形を改めて見ると見た目はあのパーンヤド えもん^{ソウルイ}に登場した？コピーロボット？に酷似しているが、これってマジでゲーム版『SOUL EATEソウルイRタイ BATTLE RESバトルレンナンスDNANCE』に登場した？魔道具『影人形』？だよな。

「コレについての説明はいるかね？」

と言われたが、「別に知ってるからいいよ！」と丁重にお断りしたが、エクスカリバーは何故か残念そうな顔をした。

そんなに説明したかったのかと思考を巡らせるが、コイツに説明とか求めると話を脱線させ自分の武勇伝とか語り出すかもしれないと0.01秒で割り出した。

それにしてもこの実物である人形を見た時、なんだこの某ネコ型ロボットの秘密道具ネタ的な人形と密かに思わずにはいらなかった。

「ならついでに昨日から、ボク達に不愉快な気持ちにさせる中途半

端な格好をしたウザくて白い宇宙人モドキ野郎をブチ殺す道具も出してよ!!! (黒笑)」

「そんなブツソーなモノは、ありませんようピカ様!? (汗)」

「在ったら在ったで、危険だろう・・・」

そんなモノが在ったら、青ダヌキの持つ秘密道具並に使いようによつては、危険だろうとポツリと静かに囁く。

ピカは、今だ真っ黒な笑顔でD A・S E・Y Oと脅迫しているが、エクスカリバーは顔を真っ青にしながら敬語で「ありません」と言う。

そんな事をいつまでも繰り返していると話が一向に進まないと思ったので、俺はピカに話しかけた。

「あのさ、ピカ。俺のバックの中に『アップルリング』って言うリングを使った菓子パンの入った袋が在ったから、それを食べていいから大人しく待っていてくれないか」

「・・・え!? リンゴを使ったパンが在るの!?!」

俺の言葉に反応したピカが、自身の技の一つである?こつそくいどう?をいつの間にか使い俺の所までやって来て、瞳をキラキラとさせた。ピカに苦笑しながら「バックに入ってたから、俺に遠慮せずに全部食べていいよ」と伝えるとエクスカリバーを無視してバックの

在る所まで光の速さに迫る勢いで駆けていった。

リンゴが好物とは聞いていたけど、あんなに喜ぶなんて昨日エクスカリバーにリンゴを食べられ、その事で少しイライラしてるのかと思っていたので、菓子パンをススメてみたがアレを見る限りちよつとは和らいだかな。

俺の視線の先には、ピカが『アップルリング』を幸せそうに食べていて本当にリンゴが好きなんだなと思っっていると・・・

ツンツン！

と何かに後ろから突っつかれ振り返るとエクスカリバーが、俺を尊敬する様な眼差しで見つめてきた。

「キミは、あの方の気をそらすコトができるとはスゴいではないか」

「いや、別に対した事はしてないさ。ピカが昨日リンゴを食べ損ねたつて、言っていたのを寝る前に聞いていただけだ」

「やはり、あのリンゴを食べたのがそんなにマズかったかね」

「タブンね。それよりも『課題』ってこの『影人形』と戦えばいいのか？」

そう尋ねるとエクスカリバーは、俺の正面に立ち真剣な表情で言っ

てきた。

「そうだ。その『魔道具』と戦いキミ自身の实力を見せてもらい、その人形に勝つコトが出来るのであればキミの知りたかった情報を教えよう」

「分かった。その『課題』を絶対にクリアしてやるっス」

俺は、この世界で初のバトルを『影人形』と戦うコトになり、絶対に勝ってやると気合いを入れバトルの準備に取りかかった。

だが、俺はこの時まさか自分とピカ以外の来訪者と出会っとは想像すらしていなかった。

T o b e c o n t i n u e d . . . |

第2話：？魔道具？って、某ネコ型ロボットが出す道具と思ったよ！！ くそや

オマケ

準備に取りかかっていた俺は、ふと今まで忘れていたコトを思い出す。

此方の世界に來た原因かもしれない、例のケースのコトをすっかり忘れていて、あの中に手掛りが在るかもと思った。

それに何か使えるモノとかも在るかもしれないし確かめないといけない。

今、武器になりそうな物は俺の持っているジエームズ伯父さん手製の『改造竹刀』と武田家と古き縁のある職人の手により作られた『竹刀』に、ピカから貰った『スマブラシリーズの武器とアイテム』だけなんだよね。

欲を言えば、色んな武器やアイテムが欲しいと思っていたし、俺の持つ武器以外のモノや役立つアイテムとかが入っていたら、俺と違う？イレギュラー？の存在で、原作以外の出来事が、もしも起きた場合の対処にこのケースの中に入っている物が役立つかもしれないとも考えていた。

何よりもこの世界で生き抜いて自分の居た世界と家族の所へ帰らないとな。

その目的を果たすために、S O U L ソウルイーター E A T E R の世界で生きるた

めに……？戦う？！

グツ！と拳を握り決意を固めたところで、そろそろお待ちかねの物を開けるとするか。

この誰も開けたことのない宝物の中に、何が入っているかと胸を膨らませ子供の様にワクワクしながら、開けてみると中には、ノートパソコン×1台、USBメモリー×2本、メモリースティックデオ×2個、レイピア×1個、機械仕掛けのグローブ&シューズセット×一式、一回り大きい六角形の窪みのあるグローブ一式、モンスターボール×14個、モンスターボール専用のボールホルダー×1、コート×2着、表が真っ白なタロットカード（？）×8枚が収納されていた。

俺は、その中に在るモノの中で目に惹いたのは、刺突専用の刀剣？レイピア？と表が真っ白な？タロットカード（？）？に何故か知らず知らずの内に触ってしまう。

すると？レイピア？から強風が、？タロットカード（？）？から眩しい光が同時に発生し、俺を中心に包み込む。

突然の出来事に驚き、咄嗟に目を閉じる。

数秒程経つと、風と光が少しずつ弱まりつつ俺は閉じていた目を開くと？レイピア？は？人？の姿へと変わり、？カード？から黒いドレスを纏った金髪の少女が俺の目の前に現れた。

「うーん。よく寝たわ」

「此処は、どこでしょうか？」

「・・・なんで、『アリア』と『金色の闇』^{ヤミ}が出てくるねん!!」

本来この世界には、居ないハズの存在である「聖剣の刀鍛冶くブラツクスミス>」&「TOLLOVE^{トイロベ}る」の世界の住人である？風の魔剣『アリア』？と？暗殺者『金色の闇』^{ヤミ}？の登場に思わず、？ツツコミ？を発動させるが、当の本人である彼女達は目をパチクリさせ俺に聞いてきた。

「「貴方（つてノは）、ツツコミ担当のお笑い芸人（なのノですか）？」

「全くもって違うから何処をどう見たら、そう思えんだー!？」

これが、俺と彼女達との何とも締まらない出会い（笑）だった。

因みにピカは、2個目の『アップルリング』を食べ始めていてコチラに気づいていなかった。

それとエクスカリバーは、とある知人に連絡してくると言っていたので此処にはいない。

（はあ、また一からピカに教えてように、俺が知っている限りの情報やこの世界のコトを彼女達に説明しないとな）

俺は、内心仕方ないと思つつ彼女達ともう一度会話をする為に話しかけることにした。

第2・5話・その小説が、人気なのかどうか謎だとマジで思った！ 〽元になっ

ようやく書き終えましたので投稿します。

彼女達をどうやって主人公達と絡ませるか悩んでこんな風になりました。

第2・5話：その小説が、人気なのかどうか謎だとマジで思った！　く元になっ

Side アリシア

く死武専？図書室？く

初めまして、私の名前は『アリシア・テストロッサ』と言います。

あつ、年は15歳だよ。

そんでもって？元・死人？にして？生還者（？）？になるかな？

あの事故で死んでしまった私は、何十年も眠っていたんだけど、あの日夢を見たんだ？妹？と呼ばれる私と瓜二つの存在に出会って、色んな事を話して別れた。

それから深い眠りについて、次に目を覚ましたら？死神様？って言う人（？）の力で蘇らせてもらい、大好きなママやりニスと再会できたのはすごく嬉しかった。

今では、できなかつた事を目一杯楽しんで家族と一緒に幸せな毎日を送っています。

さて皆さんは、私が今何所に居るかお分かりですか？

実は、図書室で本を読んでいるんですよ

時間を気にせず周りに在る本に囲まれながら、静かな読書タイムって私にとって至福の一時ひとときなんです

「あつ、やっぱりここにいたわね」

本を読んでいる途中に聞き覚えのある声が聞こえ顔を上げると、アスナが走り寄って来るのが見えた。

「まったく、授業を抜け出して図書室に居るだらうってシド先生が言っていたけど、ビンゴね」

アスナは、ハアと小さく溜息を吐いた。

「もしかして、走って此処まで来たの？」

「まあね。それよりも読書タイムは一旦止めて、指令よ。死神様から直々の命令で『ヨーロッパに在る？ブリテン島？に大至急に向かって欲しいのよねえ』って言われたのよ」

ブリテン島かあ。

もしかして、？あの子？がまた何かやらかしたのかと思いきやアスナに尋ねた。

「ふーん。大至急って事は、それって？あの子？がまたトラブルでも起こしたからそれを解決してくれって事かな？」

「さあ、どうなのかしらね。ただ死神様が言うには知人からの連絡で『そこに死武専の転入生が居るから迎えに行つてあげてね』としか言われてないから詳しい事は私も教えてもらってないのよ」

アスナは、「ホントーちゃんとした情報を寄越さないなんて、死神様には困ったわよねえ」と愚痴りながら溜息を吐いた後に、うーんと両手を上に向かつて伸ばし、元に戻すと少し落ち着き私の方へと振り向いた。

「さてと転送ポートの在るゲートまで早いところ行こう。イリスもゲートで待たせてるし急ぐわよ」

「うん。じゃあこの本を借りるからちょっと待っていてね」

「分かったわ。待っていてあげるから、それ早く借りなさいよ」

アスナから少し時間をもらい、私は読んでいた本を持ちカウンターで、図書カードに素早く記入してアスナと共に転送ポートのある部屋へと向かった。

「それにしても何の本を読んでいたの？」

道中、向かっている最中にアスナに質問され、私は借りた本を見せる。

「えっと、『フランダースの庶民』って言う小説だよ」

「あつ、あの映画化した奴ね」

なるほどねとアスナは、少し前にテレビで映画のCMが流れたコトを思い出したようだ。

それから、他愛のない話をしながらこの任務が終わったらいつも利用してる純喫茶『980円』にアスナとイリス達と一緒に寄っていこうと決めた。

T o b e c o n t i n u e d . . .

第2・5話：その小説が、人気なのかどうか謎だとマジで思った！ く元になっ

オマケ

やや！ 始めましてだね。

私が死武専の責任者の死神様だよ

挨拶はコレくらいにして、アスナちゃん達に依頼するコトになった
経緯を思い出す。

800年間音信不通であった彼からの連絡をもらい、最初は驚いた
けど舞夏ちゃんの孫がこの世界に来たコトにはさすがに予想外だっ
たよ。

彼はそのお孫さんと少しだけ話をして、お互いに自己紹介し名字と
名前を教えてもらって、それだけで舞夏ちゃんの孫だってピンとき
たって言っていたね。

さすがは、800年前の彼女のパートナーだけはあり、魂の波長を
感じず雰囲気だけで分かったらしいよ。

にしてもそのお孫さんが、実際はどんな子なのか私も話をして見な
いコトには分からないのよねえ？

手始めに死武専に入学してきたら、ココに来るように伝えようか。

舞夏ちゃんのお孫さんに会えるのが、凄く楽しみになってくるねえ

・・・あれ、そう言えばシド君から提出された書類の中に、人間の魂を食べて鬼神と化した例の盗賊団のアジトが在るってコトをアスナちゃん達に伝え忘れたけど、まあ・・・彼女達なら何とかするでしょう。

もう一つ忘れちゃいけないのが、例の転入生の入学に関する書類や試験等の準備は、スピリット君やガトウ君達に任せて、私はお茶でも飲んでノンビリしていようかあ

第3話・数多の者達、集うー！　く駄剣は、またもやトラブルを起こし【O】

一ヶ月ぶりの更新です。

どんな風に仕上げるか少し悩んだりして、こんな感じで仕上げて見ました。

では、ご覧下さい

第3話：数多の者達、集う！！　　く駄剣は、またもやトラブルを起こし【O S

Side アリア

く妖精の楽園？悠久の洞窟？く

初めましてかしらね。

あたしの名前は『アリア』よ。

一応、今は？人？の姿をしているけど、こつ見えて『魔剣』でもあり『悪魔』なのよね。

まあ、簡単な自己紹介はここまでにして、それよりも皆は何故あたしがあのケースの中に入っていたのか気にならない。

実を言うとあたしも何であのケースに入れられたか記憶が曖昧あいまいで、あまり覚えていないけどケースの中に入れた人（？）たちは微かに覚えているの。

あれは、そうね。

あたしがあの戦争から呼び出され、終戦後当てのない旅を一人で、色んなモノを見てきたりして自身の見聞をある程度広めてきたけど、あれは誰が見ても初めて見たら「あれは、驚くわねえ」と言う印象が根強かったかしら？

だって、そうでしょう。

一見誰が見ても普通の猫が、二足歩行で歩いたり喋べったりする猫を見れば、驚くなど言われれば絶対に無理と思うのよ。

それで、あたしに話しかけてきた白と黒の猫二匹によれば、何でも「来週の放送するテーマが、『伝説の武器』シリーズの特集を組んで番組内で放送するから異世界にでも行って取材してくるのじゃ。by:プロデューサーより」って言う手紙を白ネコちゃんから見せてもらい、此処に来た経緯は理解したわ。

次に、黒ネコ君が「そう言う訳で、これからちよつとおれつち達の取材に協力してほしいみゃ。じゃないとおれつちの放送枠にして全国クロファンの為の『クロ枠』を、プロデューサーから真面目に仕事をやらないと抹消とするって嚇おどされてるんだみゃ」と言ってきた。取材に協力してとお願いしてきたの。

最初は、どうしようかと悩んだが自分の『正体』をあまり他人に喋りたくないと思いを始めた頃から決めていたので、在って間もない猫ちゃん達には悪いけど丁重に断りを申し出ただけで、黒ネコ君が「うん。協力してくれないとおれつちとしても困るから、ちよつと手荒かもしれないけど少し眠ってくれみゃ」と言って、突如あたしの頭上にタライ×3を落としてきて、それをかわせずに連続で当たって気絶したわ。

それから、どれ位気絶していたか分からなくて気づいたらいつの間にか詠唱を唱えていないのに『魔剣』の姿に何故かわわっていて、箱の中に閉じこめられこの状態じゃ動くコトもできないし、暫く眠って過ごそうと考え再び眠りについた。

そして、次に目を覚ますと箱が開けられる音が聞こえたの。

誰が開けたのかと考えていると箱を開けた10代後半の青年の手にあたしが握られていた。

これで自由に体を動かすコトができると思い、？レイピア？から？人？の姿へと変え、もう一人黒いドレスを着た女の子と一緒に彼の前に姿を現したのが前回までの流れだったかしらね。

今は、何をしているかと言うと……

「へえ。それでコーイチはあたし達のことを知っていたの？（もぐもぐ）」

「なるほど、そう言う事だったのですか。だから、私のコードネームや能力等を詳しく知っていたのか納得できました（もぐもぐ）」

「えっと、納得してくれたならいいけど、この世界についての説明は、皆が食べ終わった後にでもしようか」

「うん、食べ終わった後にもお願いね。それにしてもこの『カレーパン』と『焼きそばパン』がおいしくいわ」

「右に同じく、私も暫くまともな食事を食していなかったの、この『クリームパン』と『ケーキドーナツ』は中々の美味です」

「だね 『照り焼きバーガー』も美味しいし、人間の世界に在る料理は、ものスゴく美味しくて病み付きになっちゃうよね」

「ねえ」

「ですね」

一通りあたし達の事についての説明をコーイチから聞いて、一旦休憩兼お食事タイムに突入していて、コーイチの持っていたバツクに入っていた『惣菜パン』と『菓子パン』って言う、あたしが食べたことのない食べ物を食していたの。

因みにあたしの好物になったのは、焼きそばパンとカレーパンね。

ヤミは、クリームパンとケーキドーナツ等の菓子パンが「好みになりました」って少し口元を吊り上げて笑いながら言っていたわね。

ピカは、ハンバーガー類が好きと答えていたわ。

コーイチは、サンドイッチ類やあたしとヤミとピカの食べている物全般が割と食べるし、「結構好んで週三日位はよく食べるぜ」と言っていたわね。

そうそう、自己紹介に関してはお昼を食べる前に簡単にしたので「愛嬌ね。」

唯、ヤミとは自己紹介をした際にあたしの胸を見て、「貴女は、私の敵」

？)です」って第一声で言われたけど、もしかしたら胸が小さいのを気にしてるのかしらね。

まあ、あたしも胸の事については悩んでるとしたら、大きくなる度にサイズの合うブラを付け替えなくちゃいけない事と肩がこったりして色々と不便なのよ。

少し話が脱線したけど続きと行きましようか。

「さてと、お腹も満足したしそろそろ食後のデザートに入りましようか」

「ですね。まだ幾分かお腹に余裕がありますし、早く甘い物を頂きましよう」

「じゃあ、ボクお手製のオレンの実を丸ごと使った特性シャーベットを食べよう」

「ドンだけ食うんだよー!? あれですか、甘い物は別次元ってやつですかあ!？」

コーイチのツツコミが隣から聞こえるが取り合えず聞き流して、あたし達はピカから渡された特性シャーベットを食べて幸せを満喫でましようか

S i d e A r i a o u t

Side 浩一

はい、ツツコミ一筋にして期待の新星『武田 浩一』です。夜露死苦・・・って、キャラ違うだろ！！

改めて、現状を皆に説明しよう。

さすがに、無視されるのは酷いと思ったけど、アリア達が美味しそうに食べている姿を見て、俺もデザートを食べたいなと思い耽つてるとピカから特性シャーベットを手渡され、ピカの優しさに感激したりアリアとヤミからも一緒に食べようと誘われ先程の事を忘れ仲良く食べた。

それで丁度俺達が食べ終えた頃、エクスカリバーが連絡し終え帰ってきたんだけど、ここから事件(?)が発生した。

こちらに向かつてエクスカリバーが歩いてきて時にアリアを見て何故か立ち止った。

「() どうしたんだ。急に立ち止って具合でも悪くしたのか？」

と思い、エクスカリバーに駆け寄ろうとした直後、俺の横を光の速さの如く一瞬で駆け抜けアリアの所で停まり、跪き何所からともなく花束を出し、アリアに向かって次の言葉を言った。

「前世から愛していました！！　どうか付き合ってください！！」

「はあ？　いきなりこの上半身しか服を着ていない（珍）宇宙人モドキは何をいってるの」

まさか、一目惚れ＋花束＝ナンパと言う予想も斜め上の展開に、俺とピカとヤミ達についていけないと同時に思ったであろう。

にしても、やっぱり始めてエクスカリバーの服装を見たら誰もがツッコまずにはいられないよねえ。

「正直に言うけど、アレで『旧支配者』の一人って世の終わりだよ」
「ピカも思っただけでも口に出しちゃいけないだろ」

「・・・だけど、浩一もアイツの事をボクと同じ様に考えてたんじやないの？」

「まあ、さすがに俺もアイツがいきなりナンパする事に対して呆れてモノも言えない。アイツはもう『聖剣』じゃなくて『駄剣』にランクダウンしていいと思う」

俺達は、正直に思った事をお互いに口ずさんだ。

俺達が話している間に尚もエクスカリバーはアリアにラブアタックし続けている。

アリアは正直この状況を何とかしてほしいと俺達に助けを求める視線を送ってきた。

「コイチ、何とかあの（珍）宇宙人モドキを止められないのですか？」

「止めようにも今の手持ちで、アイツだけを止めて尚且つアリアを助ける方法ってあるかな？」

ヤミからエクスカリバーをどうに止める事ができないか聞かれ、アリアの許から引き離しエクスカリバーを止める為の方法を考えるが、今の手持ちでそれを打破する物はない。

そこで、俺は例のケースの中に在った物を地面に並べどれがこの事態を收拾できる物かと悩んだけど、二本の長い耳を持った動物の絵柄イシを中心彫られた『モンスターボール』と丸い宝玉のシルエツトが描かれた『タロットカード（？）』の二つに目が留まり、それらへと手を伸ばした。

すると知らない情報が頭の中に流れ込むと同時に触れた瞬間、モンスターボールの開閉スイッチがONになり中から、耳の先と腰が綿のようなクリーム色の体毛に覆われた茶色いウサギのような姿をしたポケモン【ミミロル】が元気よく現れ、もう一方の『タロットカー

ド(?)』は【ヤミ】が現れた時と同じ光を発するが、その光はほんの数秒で止み、?カード?から茶髪のシヨートヘアに黒を基調とした衣装を纏った少女【星光の殲滅者】シユテル・ザ・デストラクターが目を閉じた状態で静かに現れた。

「?干支十二支?の?卵?うが一匹【ミミロル】呼ばれて、飛び出て即・参・上!!」

「?理?を司る?MマテリアルAアTテEエRレIイAアLル-ス?【星光の殲滅者】シユテル・ザ・デストラクターマスターの召喚に応じ、はせ参じました」

と名乗り上げて登場してきたが・・・って言うか、今?マスター?と呼ばれたような気がしたけど・・・もしかして俺がその?マスター?なのかと聞きたいが、今は時間が惜しいので手短に話しかけた。

「えっと、現れて何だけどあの【駄剣】を止める為に手を貸してくれないかな?」

「別にいいよ 肩ならしに丁度体を動かしたかったし、何より嫌がっている女性にしつこい奴にはお仕置きが必要だしね」

「私も彼女と同じく力を貸すのは構いませんが、何か『媒介』になりそうな物をお待ちしていませんか?」

「サンキュー、この恩は後で礼と言う形で返すよ。けど【星光の殲滅者】シユテル・ザ・デストラクターって?デバイス?とか持ってなかったか?」

「いえ、？ルシフェリオン？は持っているのですが、待機形態から通常形態にする事が現在不可能なので、緊急処置として私自身を『魔武器』に変換させるために明確なイメージとなる『媒介』は持っていますか？」

「『媒介』ねえ。だったらアレなら使えるかな」

取り合えず？駄剣？の暴走を止める為に力を貸してもいいとそれぞれ協力してくれると了承を得ることに成功した。

にしても【シユテル・ザ・デストラクター星光の殲滅者】は、専用のデバイスである『ルシフェリオン』を今の所使用できないとの事で、自分自身を『魔武器』に変換させるために、媒介になる物が必要らしいとの事で俺はお守りとして常時携帯している物でいいかなと思ひ、学生服のポケットからお守りの一つを取り出す。

そのポケットの中に入れていた物とは、伯父でジェームズから高校の入学祝いに貰った伯父の力作の作品の一つであり、テレビアニメ『魔法少女リリカルなのは』の作品の中に登場する主人公『高町なのは』の相棒であり、？魔導師の杖？の名を持つデバイス『レイジングハート・エクセリオン』のレプリカモデルである。

俺は取り出したソレを彼女に見せる。

「これでいいかな？」

「驚きました！？まさか私のモデルになった彼女のデバイスに酷

似した物をお持ちとは、まあそれでいいでしょう」

彼女がそう言いながら、俺の手からレプリカを受け取り、それを胸の前まで持つていき軽く握りしめると目を閉じ集中し始める。

すると【シュニテル・ザ・テストラクター星光の殲滅者】は、真紅の光を放ちながら武器化し始め俺の手に光の粒子が形を形成するかの様に集まる。

やがて光は納まり俺は手にした杖を見つめた。

それは、彼女が所有しているデバイス『ルシフェリオン』に完璧と言つていいほど酷似しているが、宝玉の部分が紫の宝石ではなく真紅の宝石になつていてそれ以外は全て同じだ。

<これが、私の眠れる魂を刃やいばへとイメージした姿・・・魔杖『ルシフェリオン』です。如何でしょうか？>

「マジで凄いな。『魔武器』に練習もなしに変身できるなんて、これならエクスカリバー駄剣の暴走を止める事は可能だな（それと、エトワール？魂の共鳴？つてできるか？）」

<（可能ですが、どうしてですか？）>

「（いやさあ、丁度いい機会だしね。あのエクスカリバー駄剣を的にして共鳴技が使えるかどうかを試そうかなつて思つてさ）」

<（できなくもないですが、魂の波長を武器に送り込んだ事もない素人の貴方が失礼ながら可能なのですか？）>

「（舐めんなよ。こつ見えて本番では必ず成功する男なんだぜ！！）」

<（はあ、呆れた方ですがそういう風は自信に満ちて言える方は嫌いじゃないですよ）>

「（サンクス。じゃあ、俺が最後の指示をエトワールに出すから、そのタイミングで？魂の共鳴？で駄剣を葬るぞ）」

<（分かりました。じゃあ、貴方の合図で始めましょうか）>

俺はエトワールと誰にも聞こえないような小声で？魂の共鳴？ができるのかと話ながら、周りには繁々（しげしげ）と杖を眺めて呆けているかの様にと演技をして誤魔化している。

「ほえー、凄いね　武器になるなんてちょっと驚いたよ」

「私の持つ変身トランスとは、随分違った方法で変わるのですね」

「そういう物を見ると改めて、僕自身が異世界に来たって実感するな」

とそんな俺の様子を眺めていた・・・ミミロル、ヤミ、ピカの一人と二匹は三者三様
とそれぞれ思った事を口にした。

さて、ちょっと遅くなったけど？ 駄剣肅清？をそろそろ始めるとしますか

作戦に関してはこのメンバーでしかできない事を僅か数秒で思いついたので、魔杖『ルシフェリオン』と化した『エトワール』以外のアリア救作戦に参加するメンバー【ミミロール】に俺の思いついた^{エクスカリバー}対駄剣用の作戦の指示をだす。

「まず、ミミロール！！ ^{エクスカリバー} 駄剣に向かって？ねこだまし？！！」

「OK コレでも喰らっておとなしくしなさい！！」

ミミロールがエクスカリバーに向かって両耳を器用に手を使うかのようになり、力一杯叩き、アリアだけしか視界にはいないエクスカリバーはミミロールの放った技？ねこだまし？を避ける暇もなく当たる。

「っ！？」

技がヒットしたエクスカリバーは、一瞬怯む。

俺はその隙を逃さずにエクスカリバーの横で、何があったのかと困惑しているアリアに向かって此方に来るように大声で叫んだ。

「アリア！！ 今の内にコッチに来い！！」

「え、……ええ、分かったわ」

遅れて返事を返したアリアは、此方に即刻駆足でやって来た。

「んじゃ、アリアがコツチに来た事で遠慮なくエクスカリバー駄剣にO S I O

K I しますか!! (黒笑)」

<あの宇宙人モドキは、塵も残さず抹消しましょう>

「わお 二人とも中々の腹黒さだねえ」

「ピカは、随分と楽しそうですね」

「分かちやう エクスカリバー 駄剣が今から浩一達の手によってどんな悲惨な目に遭うかと思うと体中がゾクゾクしちやて震えが止まらないんだ」

「好い趣味とは言えませんね」

俺とエトワールが、物騒な事を平然と言ってる横でピカとヤミは観戦する形でのん気に会話をしていた。

そんな二人を他所に俺は、親指の付け根を軽く人差し指で引っかき其処から血を流す。

「続けて、『血よ、我が命めいに従い……エクスカリバー 駄剣を拘束しろ』!!」

俺の流した血は、まるで生き物の様に俺の命に従い動き、エクスカリバーに向かつて疾走し、逃げられない様にエクスカリバーの体に血が何重にも絡みつき、やがて血の動きは止んだ。

そして、俺は懐から伊達メガネを取り出し掛けて、これから執行する駄剣に黒いオーラを放出しながら近づき微笑んで肩に手を置く。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

手を置かれた駄剣は、冷汗を額から震えながら流し怯えた表情で、俺を見つめ返してきたが俺は静かに刑を言う。

「逃げる（黒笑）」

「え？」

「5秒やるから遠くに逃げる（黒笑）」

「なぜ、そんな回りくどい事を！！？　いつそこで一思いに葬ってくれ！！！！」

「エトワール、カウント宜しく」

「了解、カウント5・・・4・・・」

俺の死刑宣告とも言うべき言葉を聞いた駄剣は、エクスカリバー人生の中で今だけ
つてない危機に直面した状況に追いやられた気分で、自分の体の限
界を無理にでも発揮するほどの勢いで全力で逃走し始めたが・・・

「もう、そろそろ始めようか？」

<3・・・はい、やりましょうか>

「んじゃ、アイツに特大の大技をプレゼントしようか」

<そうですね (珍) 宇宙人モドキにはご退場願いましょう。・・・

・0>

杖の先端を逃がしている相手に向け、杖の先端以外の部分に握って
いない方の手を下から添え力強く叫ぶ。

「<魂の共鳴！！>」

俺とエトワールは同時に叫び武器に互いの魂の波長を共鳴させあ
うと、辺りに風が巻き起こる。

杖は力を纏い形状を変え、？レイジングハート・エクセリオン？の
フルドライブ？エクセリオンモード？に酷似した姿に変わった。

「<ハアアアアアアアア！！>」

「限界まで共鳴させるぞ。エトワール！！」

<はいっ！！>

共鳴率を限界まで上げて、ターゲットである駄剣エクスカリバーに向かって発射体制を構え、必殺の言葉トリガーをエトワールと共に再び叫ぶ。

<「集え、明星。全てを焼き消す焰となれ！！ ルシフェリオン・ブレイカー！」>

放たれる真紅の極光。

それは正に【白い悪魔】と呼ばれる少女の最強の技【スターライトブレイカー】と同じ収束砲撃を
俺達の持てる魂と力の全て込めた一撃が駄剣エクスカリバーに炸裂した。

「え！？ って言うかにといち とばさないでえ ！！
それにまた、同じ様な目に私は遭うのか・・・あああああああ
あああああああああ！！？」

洞窟の壁を貫通する勢いで極光は、駄剣エクスカリバーを飲み込み一緒に外へとい

った。

こうして駄剣^{エクスカリバー}は、無事とは言わず何とか帰ってきたが俺に対して時折土下座しながら怯えるトラウマができてしまったようだが、気にしない気にしないー休みー休みと行こうか

後、ピカ達の反応はヤミとアリアは引きつった笑みを浮かべていて、ピカとミミロルは狂喜の笑みで「凄いね」と賞賛してくれた。

T o b e c o n t i n u e d . . . |

第3話・数多の者達、集う！！　く駄剣は、またもやトラブルを起こし【O

・オマケ・

あれから、？杖？から？人？の姿に戻ったエクレールが話しかけてきた。

「そう言えば、エトワールとは私の事を呼んでいたのですか？」

「まあ、名前とかないと不便だろうし【星光の殲滅者】シユテル・ザ・デストラクターって一々長たらしくて呼びにくいから、明星をフランス語で【エトワール】って言うんでそこから拝借して名前を考えたんだけど気に入らなかつたかな？」

「いいえ。そのように呼ばれるのは嫌いじゃないですし、貴方の付けてくれた名は気に入りましたのでこれから私は【エトワール】と名乗りましょう」

「そっか、じゃあ【エトワール】って呼ぶな」

とまあ、こんな感じでエトワールとほのぼのと話し込んだ。

とある昼下がりの出来事 (前書き)

ちょっと息抜きに短編を書いてみました。

今回の話は、主人公達が既にデス・シティで死武専の生徒として暮らしていると言う設定です。

因みにマカだけが、登場しますが時間軸は第2巻の第2話と第3話の中間位の話ですね。

メインは浩一×アリアの話になります。

とある層下がりの出来事

Side アリア

「デス・シティ」武田宅イントロステハウス」

正午過ぎ。

天気がいいので庭先を歩いていると、木の下で居眠りをしているコーイチを見掛けた。

そーっと近づいて行って、あたしは彼の隣に腰かける。

「何してるの？」

「ふあっ？・・・何だ、アリアか・・・」

「「何だ」とは何よ！・・・って、ちょっとコーイチ！？ 何やってんの！？」

ぼすっ、とコーイチはいきなりあたしの膝に頭を乗せてきた。

「んっ・・・アリアの膝、相変わらず柔らかいな・・・」

彼はそれだけ言うと、また居眠りし始めた。

(ひ、膝枕・・・少し前にもしたのに緊張する・・・！)

ちよつとだけパニック状態に陥ったあたしは、彼の寝顔を見ていてあることに気付く。

(・・・寝顔・・・誰かに似てるわね・・・。でも、誰だっただけ・・・?)

暫くそのまま経過していると、バタバタと誰かが慌ただしく走って来た。

「お兄ちゃん！ 何をしているのよ！ お姉ちゃんから離れなさいよー！」

「ん？・・・あれ、マカ？」

マカちゃんの怒声でようやく目を覚ました彼は、名残惜しむようにゆっくりと起き上がるが、まだ寝むそうな表情をしている。

「全く・・・お兄ちゃん。お姉ちゃんのを承も得ずに私だってお姉

ちゃんの膝枕で寝たコトないのに、羨ましいにも程があるよ。』
親しき仲にも礼儀あり』と言う日本のことわざが在るでしょ。 . .
・私だつてしてもらいたいのにな。 . . .」

マカちゃんは、コーイチに説教をしているけど彼は欠伸をしながら耳を向けずにあたしの膝で眠そうにしている。

最後の言葉はぶつぶつと小さく何かを囁いていたが聞こえなかったので尋ねた。

「 ん？ ねえ . . . マカちゃん？ 今、小声で何か言わなかった？」

「いえいえ、何でもないですよ。それよりそろそろ夕飯の買い出しに出かける準備をしなくちゃ。もうすぐタイムセールの間になるから、先に行ってる」ってお兄ちゃんに伝えといて下さい」

「うん、分かったわ。 気をつけてね」

マカちゃんは用件を伝え終わると、その場をあとにした。

あたしとコーイチはと言うと、まだ木の幹に身体を預けて居座っている。

「 アリア」

「何？」

「今度は俺が膝枕してあげるから、良かったらまたここで・・・日向ぼっこでもするか？」

「そうね コーイチといれば、楽しい夢が見れそうだしいいわよ

」

あたしが、微笑みながら言うと彼もそれに答える様に笑う。

(こんな日もたまには、いいかな)

あたしは、そう心の中で思いながら二人だけの幸せな時間を心地よい風と共に過ごした。

To be continued . . .

Happy Valentine's Day!?(前書き)

久しぶりに更新しましたが、投稿するには遅いかも知れませんが楽しんで読んで下さい。

今回の話は、主人公達が魔女アラクネ討伐後の話と言う設定です。

因みに新たなキャラクターやヒロインを小説に出しては構想を考えながら本編も仕上げてますのでそちらも楽しみにしてして下さい。

さて、今回登場しますのは『魔法少女リリカルなのは』よりアリシア・テストロツサの登場です。

彼女やプレシアやリニスは、ソウルイーターの世界に流れ着き、死神様の力により生きながらえたと言う設定です。

時間軸は第17巻の第69話と第70話の中間位の話ですね。

メインは浩一xアリシアの話になります。

Happy Valentine's Day!?

Side アリシア

「武田宅イントロステハウス?リビング?」

「コーイチっ!」

「よう、久しぶりだな。シア」

「バーン!!」

と音を立てながら、玄関を開けると彼が「壊さないでくれよ」と私に苦笑いした。

「今日の仕事とか終わったの?」

「いや、今日はしたいコト多かつたけど、死神様から『浩一君は、働きすぎだから偶^{たま}には休みなさい』って三ヶ月ぶりの休みを貰ったんだ」

コーイチは、魔女アラクネ討伐や黒騎士討伐等からの功績を認められ私達より上の職人ランク?三ツ星?へと唯一人だけ昇格し、スパ

ルトイの中で最強と言われ、様々な分野で活躍したりしているので、そのコトで死武専内ではかなり有名である。

彼が担当しているのは、主に情報収集や偵察等で、死神様からも凄く信頼されていて、様々な任務を任されてはピカちゃんを始めとした12匹のポケモンチーム？十二支？やアリアさんやエクスカリバーや他の魔武器のパートナーズを率いて世界中を駆け回っているからあまり会えないんだよね。

「それにしても何で休暇もらえたの？ あんなに忙しいって電話で言ってたのに……」

「大変だったけどね、シド先生やスピリット先輩達のおかげで一週間位の休みがもらえたんだ。……もちろん、シアと過す為に決まってるだろ？」

満面の笑みで言うものだから恥ずかしくなって下を向く。

クスリと彼が笑った。

「夕食、食べていくよな？」

「…コーイチの手料理！」

嬉しそうに笑ってキッチンに向かった彼を見送り、バックの中にあるチョコをどうしようかと考えていた。

「ごちそうさまー！ホントおいしいよ、コーイチの料理……うらやましいなー……」

「そんなコトないぜ。俺もシアの作った手料理を食べたいな」

彼の囁きにピクリと肩が震えた。

(……あるには、ある。バックの中に……)

「う、ん……そのうち、ね」

「……楽しみにしてるよ」

何か話題を……！と考えているとコーイチが思い出したように、

「そう言えば、随分前にシアが見たいって言っていた。DVDをテレビンから貰ったんだっけ？」

「あ、そうなんだ。この後暇だし見たいな」

「じゃあ、俺の部屋に行くか？」と手を引っ張られてコーイチの部屋に連れて行かれた。

「わー久々だね、あんまりコーイチの部屋って来ないから」

「……なあシア、今日って何の日か知ってるか？」

「……バレンタイン、だよな……」

ニッコリ笑ってコーイチは私の顔を見た。

恐る恐るバックからチョコを出し、差し出すとコーイチは嬉しそうに受け取った。

「よかった、ないのかと思った」

「……そんなわけではないでしょ。その渡すタイミングが遅れちゃたけど……」

「うん、ありがとう　じゃあいただきます」

コーイチは、包装紙を括っていたリボンを解き中のチョコを一つ摘

まんで食べ「美味しい」とそう言ってフワリと笑った。

その笑顔を見ると、お母さんやリニスや椿やテレビさんの三人と一台の指導の元で、頑張って作ってきたかきがあり、嬉しさがいっぱいいで心も満たされ、同時に顔が赤くなった。

私が、そんな状態になっているとコーイチが急に顔を近づけてきたので、さらに真っ赤になる。

「…シア、顔赤いぜ？」

「……っ、コーイチが…！」

「俺ねー、それよりも今はチョコより凄く欲しいモノがあるんだ」

彼が、意味深なコトを口ずさんだので、チョコ等の甘い物がもしかして苦手だったのかと思い、少し不安になって尋ねた。

「……………甘い物、苦手だった？」

「いや、好きだけど？」

「えっと、じゃあ何が……………」

「何がいいの？」とそう言う前にぐるりと私の視界が変わった。

ぼぶん、と音がしてベットに押し倒されていた。

「コー、イ……！」

「俺が今一番欲しいのは、……シア、だぜ？」

そう笑ってコーイチは私の頬をすーっと撫でた。

撫でる冷たい指にぴくりと肩が震えた。

「……シア」

「んっ……」

耳元で自分の名前を呼ばれた。

コーイチの柔らかい髪がくすぐりたい。

恥ずかしくなって逃げようとする両手首を捕まねベットに押し付けられる。

「シア、ベリに行へっ。」

「……っ、っ、っ。」

「だーめ、どこにも行かせないよ？」

「コーイっ……!!」

人差し指を私の口にあてて、ウインクする彼を見て顔がさらに熱くなった。

見とれていると、急に口を塞がれ舌を絡ませられた。

頭が真っ白になって何が何だかわからなくなる。

「っ、んん……」

「……ねえシア」

ほのかに彼が口にしたチヨコの味がする。

(さっきあげたチヨコかな)

なんて考えていると唇が離れ、名前を呼ばれた。

するとざらりとしたものが首筋を舐めた。

「……んっ、やめ……」

「続き、するよな？」

そう笑顔で尋ねられたら、私は頷くしかなかった。

コーイチは嬉しそうに好きだよと何度も呟いた。

甘い、彼の笑顔に、私は真っ赤にしなから頷いた。

「……シア、可愛いぜ」

「私よりコーイチの方が可愛いと思うけど」

「……そう、か？」

「そうだよ！ 女の子の私よりも手首や足が細いし、肌だって白いし……！」

「それじゃあ、もっと男らしいところを見せないとな」

「……ふあっ……コーイ、いやっ……！」

「俺がシアより可愛いなんて、言わせない？」

その後、私はコーイチに何をされたかはとても恥かしくって言えないよ。

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
:
|

この時間は、何時まで続くだろうか？（前書き）

さてさて、新たに参戦キャラクター兼ヒロインに『魔法先生ネギま！』より神楽坂明日菜の登場です。

彼女とガトウの二人以外にも登場させようか悩んでいます。

彼らが、このソウルイーターの世界に来た経緯は、もしもガトウがあのに死なないで助かって欲しいと強く願ったアスナがタカミチの手を放し駆け出して、謎の光に包まれアリシア達に助けられたと言う設定にしてまして、十年間共に家族見たいな感じで過ごしていて、プレシアとガトウの二人が夫婦になっているとかアリシアやアスナが姉妹見たいなとか少し悩んでいます。

じゃあ、リニスはやはり家庭教師兼二人の姉になるのか？

とまあ、面白おかしく投稿小説を楽しく構想を練っています。

今回の話は、アスナが自分が本当にこの世界に居ていいのかと悩んでいるのを浩一がアドバイス(?)をする感じで仕上げたモノです。

この時間は、何時まで続くだろうか？

Side アスナ 明日菜

「死武専？屋上？」

いつか自分の居た世界に必ず戻らなくてはいけない。

そんな事はわかっていたけど。

ただ今の生活が凄く楽しくてとても充実してて、浩一とアリアとピカとエクスカリバーとシアと死武専の皆と過ごした日々が『過去』になるのが嫌で嫌で仕方がないと切に思った。

皆と私の名前を呼び合う声が、聞けなくなるのは凄く辛い。

何故こんなにも依存してしまったのだろうか…？

『人生は楽しんだもの勝ち』が私のモットーだった筈なのに、なんで色んな人達と深く関わってしまったのだろうか…？

いつの間にか、この世界で出会った人達がない世界なんて考えられなくなってしまっていたんだ。

「アスナ？ アスナってば」

浩一が、私を呼ぶ声が聞こえ閉じていた目を開く。

「どうしたんだ？ ぼーっとしち待ってよ」

「少し考え事しててさッ」

「ふーん。相談にのるぜ？」

「大丈夫。そこまで深刻なコトでもないし」

浩一からの申し出をやりわりと断る。

「
…俺が思うに」

不意に言葉を紡ぎだした浩一に、私は耳を澄すます。

「先の事より？今？が大事なんじゃないかー」

？未来？より？今？ね。

「あははっ。浩一らしいわね」

「まあ、アスナにアドバイスした訳じゃねえけどなあ？」

へへつといたずらつ子の様な無垢な笑みを浩一は浮かべて言った。

「そうなの？ まあ？ 仮？ にアドバイスだったとしても全然アドバ
イスになっていないわよ」

「へっ？」

「ふふつ。 間抜け顔になってる」

ぽかーんとした表情の浩一。

（アドバイスになってないなんて嘘だよ）

私のコトをよく見ているからこそ、浩一だからこそその返答。

なんだかそういう所が？ ナギ？ に似ていて面白い。

「あははっ
「！」

「!？」

私がいきなり笑いだしたのに、ビックリしたのかびくっと肩が上がった浩一。

「そう言えば、マカに『久しぶりに皆揃って、死武専入学三ヶ月記念i n t a食パーティーをしよう』って言われていたからマカとソウルの住むアパートに早く行こう?」

すくっと立ち上がり私が一言いって、先に歩き出した。

浩一も少し遅れて立ち上がり、私の後を追って歩きだした。

「……その時が来るまで、今は皆と過ごす時間を大切に」

私は、誰にも聞こえないように静かに夕焼け空に向かってそう囁いた。

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
:
:
:
|

飴×キス（前書き）

さて、毎度お馴染みの番外編です。

参戦キャラクター兼ヒロインの一人である『T O L O V E する』より金色の闇^{ヤマ}の登場です。

彼女以外にもコーイチの持つカードから後七人くらいは登場します。

彼女が、コーイチ達と共に活躍するのか書きながらワクワクしています。

因みに原作の主人公であるマカとは、ヤマは親友になります。

今回のメインは、コーイチ×ヤマの話で原作の第22話と第23話の中間のストーリーです。

飴×キス

Side ヤミ

「デス・シティ？武田宅イントロステハウス？」

あの前夜祭の死闘から少し経ち、私達は忙しくも騒がしい日常を過ごしていましたが、この日は死武専が休みの日で、コーイチからデートに誘われた日でもありました。

外でのデートを終え、自分の部屋でコーイチと共に大好きな本を読んで寛いでいるときに、突然それは起こりました。

「それで……ケホケホ」

「……ヤミ、大丈夫かあ？」

「はい、大丈夫です。……ちょっと喉が痛むだけですから」

私はコーイチに心配をかけないように笑ってごまかした。

コーイチはウエストポーチの中から何か取り出して、「うーんと、喉が痛む時はやっぱコレだよな」と言っつて、私の掌の上に置いた。

それは、可愛いらしい包み紙に入っていました。

「飴をなめると、少しは良くなると思っつてねえ」

「ありがとっつございます、コーイチ！」

私は微笑んで頷いて飴の袋を破り、自分の口へとほっつりこみなめた。

コーイチも自分の分をポーチから取り出した。

私の飴はレモン味です。

コーイチが飴を食べ始めたのを見て、私もなめるのを再開しようと思っつたとき、ふとコーイチに話しかけました。

「……すみません、コーイチ。私は、コーイチが食べている味の方も食べたいのですが……」

「えっ!?!?……ヤミ、今なめているレモン味のもしかして嫌いだっつたのか!?!?」

コーイチは「同じ味の飴が、あったかなあ?」と言いながらウエス
トポーチの中を探します。

(……………ハア、そうじゃないのですが、やはり彼には直接伝えな
いといけませんね)

私が内心溜息をつきながら決心していると、コーイチは自身がなめ
ていたイチゴ味の飴を見つけましたので、「はい」と言っ
て私の掌の上に置いた。

私はコーイチに心の中で決意したコトをはっきりと伝えるように言
った。

「えっとですね、こっちはなくて……………こっちのを」

私は掌の上に置かれた飴を指さした後、コーイチの唇あたりを指さ
しました。

「……………へっ!?!」

コイチはその意味を理解したのか、顔を真っ赤にさせていますが、私はそんな彼に顔を少し近づけていった。

「え！？ヤ、ヤミ……………！！」

コイチが私の名前を呼ぶのが聞こえたが、聞こえないふりをしてそのまま彼にキスをした。

最初は触れるだけのキス。

でもだんだんと激しく変わっていった……

「……………ん」

時々、彼が苦しそうに息をもらしたので、私はその声が聞こえたため角度を変えながら何度も彼にキスをし、口実に使われた舌を、コイチの口から自分の口に移した。

「……………ごちそうさまでした」

私がつこり笑ってそう言うと、コーイチは顔を更に真っ赤にさせた。

これが、貴方に触れるための方法です。

T o b e c o n t i n u e d . . . |

料理中には、ご用心？（前書き）

またも書き上げて見た番外編です。

今回は、参戦キャラクター兼ヒロインの一人『魔法少女リリカルなのはA's』より？初代祝福の風？リインフォースの登場です。

原作第23話と第24話の中間ストーリーですね。

メインは、浩一×リインフォースの話です。

料理中には、ご用心？

Side リインフォース

「武田宅イントロステハウス」キッチン

「私が今何をしているのが分かっているのですか？」

「分かってるよ」

「なら大人しくリビングで待っていて下さい」

「だけど、断る」

「・・・はあ」

私は今キッチンに立っています。

料理の最中なのですが、背中に入ばりついているマスターが気になつてそれ処じゃないんですよ。

そもそも何故こうなったのかは数分前……………

「リン、お腹すいた」

「さつきからづるさいですよ！

今作っているのですから急かさないでください！」

「……………」

って突然マスターが無言になって、おとなしくなったなと思ってホツとしたら、後ろから抱きしめられてるという状況になりました。

ここまでが先程までの出来事になります。

で、私はその事に関しては気にしていません（日頃からマスターは、人一倍スキンシップ激しいですしねえ）が、構わないのですけど、料理中にされるとさすがに動き辛いです。

「マスター？いい加減離れて下さい。でないと動けないし料理も出
来上がりませんよ」

「……………ヤダ」

「ヤダって……………こっちがヤダって言いたいんで……
きやあ！！」

兎に角離れ って、ちょ何処触ってるんですか?! 止め!
「！」

「だってリン、全然構ってくれないから気を逸らそうとしたんだよ
」

さわさわと私のお腹を撫でるように触ってくるマスター。

だよって……………、子供じゃありませんのに可愛くないです!!

そんな思考を頭で考えるのと改めて説明すると左手で、マスター
の左手をつかんでいて、右手はお玉を持った状態です。

マスターの右手はお腹を今も撫で回している訳なのだが、私もお玉

を置くに置けなく（料理が遅れますし）、それをいいことに調子に乗るマスター。

「ひあつ・・・、何を?!」

首！ 首なんて舐めないでよ!! 変な声出るじゃないですか!!

「クスッ もういいよ、リン。俺がリンを食べるから」

「~~~~つ、みみみ耳元で喋らないで下さいよ!!
バカマスターなんか知りま・・・、んんー!？」

いつの間にか左手を取られていて、そのまま向かい合わせに回転させられ、口を塞がれた。

「・・・んっ・・・（苦し・・・）」

離れようにも頭と腰をがっちり固定されている。

でも、このまま抵抗しないでいると完全に向こうのペースな訳で・・・
・・・、非常にまずい。

さすがの私も身の危険を感じ、とっさに右手のお玉を力一杯振り上げるのであった。

「で、なんでいきなりあんな事をしたんですか？」

「エプロン姿のリンに萌えたから」

「????？」

私がお玉で叩いた頭の部分を摩りながら、マスターは言いますが意味が分からず、この件をアリアとヤミとエトワールとマカ達に話したら、次の日に死武専内の廊下にて彼女達に追われるマスターの姿を目撃しました。

それから、？萌え？と言う言葉をスピリットから教わり、男の憧れ

の一つだと答えた直後にマカが後ろから分厚い辞書でスピリットの脳天めがけて？マカチヨップ？で沈めた。

今日も平和だと感じつつ、図書館で新しい料理の本でも借りてマスターを驚かせる料理でも勉強をしましょうか。

T o b e c o n t i n u e d . . . |

第一回死武専トロステ放送部（前書き）

こんなの書いて見たくて、書き上げました。

では、ご覧下さい

第一回死武専トロステ放送部

「さて、第一回死武専トロステ合同放送部始まります」

ドンドンドン！！

パフパフパフ！！

「これは、俺とピカとトロとマカとゲストの二人＋二匹＋のメンバーにて、ラジオ番組っぽく皆さんに楽しく過ごしてもらえように面白可笑しく放送しちゃいます」

「メインは、ストーリー上に登場した様々な作品のアイテムや必殺技や能力やキャラクター等を簡単に説明したりするね」

「さらにここで呼ばれるゲストには、普段どんな事をして日常を過ごしているのかや身近な人物の秘密をこっそりと答えてもらったり、様々な質問をゲストが答えられる範囲でお送りしていきます」

「皆に楽しんでもらえる様にトロもガンバルニヤ」

「じゃあ、パソナリティー兼司会を務めます【武田 浩一】と」

「同じくパソナリティー兼司会を務める【ピカ】と」

「アシスタントを務めます、【マカ＝アルバーン】と」

「同じくアシスタントの【井上 トロ】でお送りしますニヤ」

「では、栄えある第一回目のゲストはこの人に登場してもらいます。マカの相棒兼魔武器（魔鎌）でもある【ソウル＝イーター】にお越しただきました」

「この番外編で漸く俺の登場だぜ！」

「そんな事より早く皆に挨拶しないの？」

「おっと、そうだな。紹介が遅れたが俺は【ソウル＝イーター】で、マカの相棒だぜ」

「では、ゲストが来た事だし本日のテーマを発表するニヤ」

「本日のテーマは、ズバリ『死武専って、どんな場所？』だよな。お兄ちゃん？」

「まあなあ、『死神武器職人専門学校』通称？死武専？って世間一般的にはそう呼ばれているな」

「この学校は、世界中の税金で成り立っていて…武器と職人が通い世界の平和を守るいわば…ヒーロー養成学校だね」

「それと？死武専？に勤める人達の大半は一応『国際公務員』の扱いで私とソウルも学生だけどそのカテゴリーに死神様の公認で入っているよ」

「そう言えば、この学校で人気のある？武器？と？職人？はスポンサー契約もしたりして、身近な人物で挙げるなら【壺職人キリク・

ルング」と【火の壺ポット・オブ・ファイア】と【稲妻の壺ポット・オブ・サンダー】のコンビが契約していたぜ。アイツら殆どの収入を自分達のためじゃなくて、貧しい国の復興のために寄付しているって前にキリクと音楽の話で盛り上がった時に話を聞いたな」

「ふにゃ。キリクさんって凄い人なのニヤ。国の復興のため寄付するなんて、トロなら中トロを朝昼晩と毎日食べるためにお金を使っちゃいそうかもニヤ」

「さあて、盛り上がってきたけど、そろそろ終了タイムが近づいてきたな」

「まあ、仕方ないよねえ。今回はこんな感じで短く放送しちゃたけど次回はどんな事をするの？」

「そうだな。次回の分に関して感想とかあったりしたらそれをテーマにして放送しようと考えてるぽい事を監督プロデューサーが言っていたから何かこんな事をテーマに挙げて放送してほしい事を感想にして送ってくれよ」

「次回の放送は不定期で、もしかしたら何処かのお茶の間にて、お邪魔して放送するかもニヤ」

「それでは、今回パソナリティー兼司会を務めました【武田 浩一】と」

「同じくパソナリティー兼司会のボク、【ピカ】と」

「アシスタントの私、【マカニアルバーン】と」

「同じくアシスタント、【井上 トロ】と」

「ゲストの俺、【ソウル＝イーター】がお送りしたぜ」

「ハハハ「じゃあ、バイバイ」」」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1458p/>

SOUL EATER ~ 聖剣と魔剣に選ばれ、剣職人を始めました ~

2011年10月6日21時31分発行